

ISチートを超越する者

豆しばんど

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これまで何度も転生してきたオリ主が次にむかうのは！

チートのチートによるチートのための無双劇！

強くてニューゲームではなく

強すぎてもはや作業の時代が始まる！

(題名変えました？、あとログインしなくても感想

書けます！)

過去編(笑) | 255

過去編(笑) 2nd season

263

決断 | 271

第21話 | 277

レボリユーションツ！(意味皆無)

288

トランザムライザアアアツ(出てき

ません) | 301

さあ作業の始まりだ

転生？もう飽きたよ

「ここは、またかあ」

「やあ久しぶりだね」

「お前がここに居ると言うことは俺はまた転生するのか」

「おお！わかつてるねえさすがだよ」

「うるさいぞこっちは何回転生してると思ってるんだ」

「君はいままで食べたパンの枚数を覚えているのかい？」

イラツ☆

「どうやら一度制裁をくわえなきやいけないなあ」

「エ、チョットマツテナニスノヤメツアツ」

神へのO☆H A☆N A☆S H I☆を終えて俺はぼろ雑巾みたいになった

神に言う

「さっさと転生させやがれこのクソ神」

「イテテテ、わかったよ転生させる前に行く世界のことを伝えておくよ」

「いや、別に説明しなくていいめんどくさいし、お前と話したくないし」

「僕の扱いひどくない!!」

「そんなもんだらうお前なんて」

「まあいいやとりあえず言うけど何か特典とかいる?」

「これ以上俺は人外になりたくないからいいや」

「まあね、わかってたよ君がそう言うのは」

「じゃあ聞くなよ」

「いやこの言葉は神様転生系小説に必要な言葉だから」

「おいメタはやめろ」

「じゃあそろそろ送るね」

「さっさとしろ」

「では張り切っていきましよう!!」

そう言うのと俺の腹の辺りに一瞬で何かが巻かれた

「おいこれはなんだ説明しろ」

「いつも転生つて下に落ちて転生するじゃん?なので今回は

上に投げ飛ばすいわゆる逆バンジーで転生させます」

「まてまてまて!上に普通に壁があるだろ!やめろあんなのにぶつかったらたんこぶ

「じゃすまないぞ?」

「それでは? 張り切っていきましよう!! てーんせーいたーいむ?

ポチッ

「うわアアアアアアアアアあ!」

上に投げ飛ばされた俺のスピードは光速に達し壁にぶつかった

「ちくしょう…覚えてろよ…クソ神」

「覚えておいてあげるよー3秒ぐらい」

その言葉を最後に俺は意識を失った。

オリ主説明

主人公

霧雨神姫《きりさめしんき》

容姿

落第○士の○輝君の髪の毛が白いバージョン

強さ

何度も転生していて転生するたびにその強さがそのまま受け継がれるので毎回強く
てニューゲームどころか

強すぎてもはや作業になっている

魔法とかも使える

よく使う魔法

転移

名前のとうり行ったことのある場所に転移することができる

次元

異次元空間を作りだしてそのなかにものをしまったり出したりする

自身の修行の時にも使う

空間の中では時間は止まっている

普段は自分にリミッターを5つかけていてそれでも

織斑千冬を指一本で倒せる強さ

前世での死因は瓦割りをしたときに力を込めすぎて地球そのものを破壊してしまい
その時の爆発に巻き込まれて死んだ

おまけ

神

容姿

赤の天パにやる気の無さそうな顔（銀○の○時の髪が赤いバージョン）

常日頃仕事をしないことで神のなかでも有名

ちよくちよく神姫に念話をしている

本人は「やる時はやるから」などと絶対にやらないやつが言うことベスト10に入る
言葉を三日に一回は言っている

時は流れて

こんにちは！霧雨神姫です！

転生から5年が経ちました。え、早いって？まあキニスルナ

ところでいま俺らは絶体絶命のピンチです

なんと日本に向かつて2341発のミサイルが発射されてるようです。

ですがもうすぐで日本に着弾つとゆうところでなんだか

カツコいい機械を見に纏った女性が現れたではありませんか

ふむふむ成る程あの機械はガン〇ムみみたいなパワードスーツ

みたいだね

そんなこんなで空の戦いを見ているとまわりには誰もいなくなってしまった

ありやりや？誰もいないぞ？みんな避難したみたいだね

さーて俺も避難しますか

そう思い俺は歩き出した

避難所が見えたやつとついたあ

と、思ったときそれは起こった

ズドオオン

「……………だろ？」

避難所が爆発した

嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ？

あのなかには父さんや母さんそして姉さんも入っていたはずだ

俺は急いでそこに駆けつけた

熱気が凄い

俺は魔法を唱えた

「ハイドロボール！」

すぐに熱気は収まり俺は家族を探し出した

この避難所は町の住人全員が入れるほどの大きさに作つてあるので探すのには苦勞した

探した結果 いた

みんなはそこにいた真つ黒になつて

探すのは簡単だった

俺達家族は自分の名前が彫つてある指輪を持っている

あんな熱い中でもこの指輪は輝き続けていた。

そして：俺は全てを失った。

この事件は後に白騎士事件と呼ばれる

父 霧雨 信二

母 霧雨 夏目

姉 霧雨 神華

俺は3人の墓の前に立っていた

この墓は俺が作ったものだ

魔法を使わず素手で。

あのあとすぐに政府の人達が来た。この街で生き残ったのは俺だけだったらしい。

そして政府は言った

『この街を無かった事にする』と

正直意味がわからなかった

政府の人の話しはこうだ

『今回の白騎士事件でIS「インフィニット・ストラトス」の性能を理解した各国の人間たちはすぐにISを受け入れる準備をしている。少し時間が経てばこの世はISが世界の中心となつて世界は回り始める。すでにIS操縦者育成のための学園も建設するめどがたつている。』

そこでだ、白騎士事件はもうすぐ始まるISの世界の第一歩となるものになつただがその事件で死者を出してしまつては世間の反対も有るだろう。なのでこの事件で唯一の死傷者が出てしまったこの街はこの世には存在しなかつた街とする。既にこの街の存在を知っている人間は

こちらの交渉に依じてくれた。日本地図にももうこの街は抹消させてもらった。後は君だけだ君さえこの街を忘れてくれればいい、君の生活はこちらで保証する。』
とゆうことだ

俺は怒りが止まらなかつた

「ふざけるなう…忘れろだど？できるわけないだろ！

此処には家族や友達そして街の皆との思い出がある！

忘れることはできない？」

俺は叫んだ

「……そうか、まだ五歳の癖に随分と言えるじゃないか

だけど君にもう道はない。君の親戚は既に死亡している

この街の外にいる親戚にもこちらで手は回してある

残念だったね」

政府の人は顔をにやけさせる

「おっと、今日はもう時間だ、また明日来ることにするよ。明日はちゃんと〈準備〉をしてね。」

準備というところが気になったが今日のところは帰るようだ

「何度来ても俺はここを出ていくつもりは無いですから」

政府の人は相変わらずにやけている

「そうかだがこちらとて諦めるわけにはいかない

また明日来るよ」

そう言つて家を出ていった

車の音が消えたあと俺は声を出さずに泣いていた

ああ、何故だろう何度も転生し何度も家族を失った

もう何回めかもわからない家族の消失

何度も人生を歩み色々な事をし慣れていった

それなのに、どうしてこれだけは慣れないのだろう。

こんな悲しみ無くなってしまえば良いのに

そんなことを何度思ったことだろう。

自分の力が有れば無くすことなんて簡単だろう。

だけど心のどこかでそれをしてはいけな思っている自分がある。

そして俺は泣き続ける

次の日

また俺は家族の墓の前にいた

理由はわからない

だけど俺はここに来たかった

別に白騎士とか言うやつに復讐なんてことはしない

復讐 ずっと前の転生でしたことがある。

俺の力が有れば簡単なことだった

だが復讐を終えたとき俺にはなにも残っていなかった

その時に知った、復讐は孤独にするだけだと。

復讐してもなにも変わらない達成感なんてない

あるのは底無しの虚無感だけだと。

それに俺は白騎士の搭乗者の顔を見た。

神眼と言う魔法でだ

その女性の顔は悲しんでいた

悔やんでいた

何よりも涙を流していた

その涙がどんなものかはわからないが

彼女はとて後悔していたのだろう

そんなことを考えているうちに昼が過ぎようとしていた

家に帰ろうとしたときに《それ》は現れた

俺はそれを見たことがある、形は違うが確かに同じものだった、それはISだった。

鋼鉄の塊から昨日の政府の人が出てきた

「どうだい？これがISだよ。でもこのISのコアは世界に

467個しかないんだその内の1つを見ることが出来たんだよ君はうれしいだろう」

「それが昨日あなたが言っていた《準備》ですか」

「そうだよ。」

「何故あなたが乗らないのですか？」

「残念ながら I S には重大な欠陥があつてねえ女性しか乗れないんだよ」

「ではあなたは見ているだけの木偶の坊というわけですね」

「！　ま、まあそういうことになるね」

「あるときは金に頼り、あるときは女性に頼る

あなたはなんて残念な人なんだ」

「オイツそれ以上いえば I S での攻撃をするぞ

政府からは君のこの街からの退去と言われているからねえどんな方法を使つてとは
言われなかつたよ。

だからいま僕たちは君をこの世から退場させることもできるんだよ、後ろには逃げ場
はない、さあどうするおとなしくこの街から出ていくか、この世からの永久退場か

—

俺の家族の墓が立っている場所は小高い崖の上だ。崖は海に面しており崖から落ち
れば海の中へおちる。

今の俺に逃げ場はない。

「ここで力を使ってもいいがこいつらにはばれたくない。

とりあえず話を繋げることにした。」

「もし俺がここから出ていったら政府はここをどうするつもりなんだ」

「政府はここをゴミの埋め立て地にでもと考えてるよ」

「世の中は腐ってるな政府もお前も」

「こつちを怒らせても良いのかな？こちらにはISがある

君なんて一瞬でふきとばせるんだよ？」

「俺はここを退かない俺は家族の墓を守らなくちゃいけないんだ？」

「……もういいよ、もう死んでしまえ」

そう言った瞬間遂にISが動き出した

その手に持っているのは大人の人より大きな剣

それをこちらに向けて振ってきた

間一髪避ける

自分を見ると服が右斜めにスパツと切られていた

その瞬間俺は戦闘モードに入った

でも今回は戦わない。あることをするためにただひたすら避ける避け続ける

「クソツッ何故当たらない？」

操縦者がそんなことを言うなか俺はただひたすら避けていた。
もうすぐだ

あと少し

これで？

終わった？

「これでも食らえっ！」

と相手のＩＳからミサイルが飛んできた

俺の近くにそれは着弾した

すると俺の立っていた地面は崩れ去り俺は

海へと墜ちていった

だが

それでいい

俺のやることはやった

俺のやっていったことは家族の墓に結界を作ること。

あの結界はとりあえず核爆弾にも耐えられるように

魔力を込めた

数年は大丈夫だろう
そう思い俺は海のなかで眠った

神は言っているここで死んだらまた転生な。と

…き…ろ

なんだよ

起きろ？

なんだようるさいなあ

すう—————

ん？

起きろオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！

うるさいわあ？

ドゴン！

あ、やべえ結構力を入れちゃった、富士山吹き飛ばすレベルの力で殴っちゃまったああああああ！

どうしよう どうしよう

とりあえず魔法で時を戻せば何とかかなるよね。

「そんなことしなくても大丈夫さあ」

そんなことを言ったのはさっき俺が殴り飛ばしたやつ

なんか見覚えあるなあ赤い髪の天パ……

「クソ神イイイイイイイイイイイイイイイイ！」

ズドオオオオオオオオオン！

「ふう、スツキリしたなあコレで仕事をしない悪は滅びたぞして今回の転生の仕方
の仕返しさ？」

(第一話)

「ぐ、ぐあああ。まったく神姫君何してくれるのさ、

さすがの僕も消し飛びそうだったよ」

「オイ神よ」

「なんだい？」

「なんだよ俺の今回の人生はアアアアアアアアアア！」

「え、なんなのあれあんな重い話はじめてだわ？」

俺まだ5歳だよ5歳で天涯孤独って何なのさ？

何なの？お前俺に恨みでもあんの？」

「あ、あのーそれがあーそのおー」

「何かなあ？何かしたの？ほら言ってるらん。」

どうすんの？ねえ運命が消えたってことは俺

死んだんじゃないん歴代最短だよ俺の寿命」

「いや、君は死んでないよ」

「お前の言うことなんて信じられるか」

「信じてくれよおー」

「今君がここにいるのは僕が連れてきたからなんだ」

「ふーん で、何でつれてきたんだ俺を」

「いやいやもうそろそろ原作に関わって欲しいなー

なんて思ってる」

「いやいやそもそも俺原作なんて知らんし」

「（；。㊦）」

「君の一番好きなアニメは何？」

「家○教師ヒツ○マン○ボーン」

「成る程後は？」

「ガン○ムビ○ドファ○ターズ」

「よしそれでいこう」

「ん？」

「霧雨神姫！」

「なんだよ」

「いまから君にISの専用機を渡そうと思う」

「いや要らねえ」

「え、何でさ？」

「別にISぐらい自分で作れるから」

「はい出ましたチートですよチート」

「それがなんだと言うんだチートで何が悪い？」

「みんなだつてやってるんだろ？ポケ○ンで色違いの伝説のポケ○モン草むらから出てくるんだろ？」

時代はチートなんだよ！世界最強がなんだ？

チートには手も足も出ねえんだよオオオオオオオオオオオ！

「うわあ神姫が崩壊したあああ」

「はっ、俺は何を？何かさつきよりスッキリした感じがする」

「そ、それは良かったじゃないか」

「おい神さつきともとの世界に戻せ」

「わかったよでも絶対原作に関わってね」

「ええええええええええええええええだつて何かめんどくさそうだなあ」

「文句言わない？もとの世界に戻ったらとりあえず

　　I S 作りなよ」

「その事なんだけどおい神お前I S 出せるか？」

「あれえ？結局貰うんですかあ？」

「なわけないだろ、魔法で読み取るんだよ」

「ああ、確か解析魔法だったつけ？」

「そうだからさっさとしろ」

「かしこまりましたー」

　　そう言つて神はI Sをだした

「ねえねえたまには魔法さあー詠唱つきでやってよ」

「何でだよ」

「いいじゃんこつちはI S出してあげたんだからさあ」

「わかつたよやればいいんだろやれば」

　　そう言つて神姫はI Sにてを当てる

『我全てを読み取るもの、汝の情報　それは私の血となり肉となり骨となる？読覇！探求者の英知！』

その瞬間神姫の手が輝きISの情報全て神姫へと渡った

「ふう、おい神終わったぞおー」

と言いつつ神姫は神の方を見る

そこには腹を抱えてゆかを転げ回っている神の姿

「ぶひやややや神姫君なにその詠唱ぐふふふふ

マジの厨二乙じゃんぎやはははははははなにそれ恥ずかしくないの？あ

ひやややややひやひやひや」

ブチイッ

この瞬間神姫の中でなにかが切れた

「おい神いそんなに詠唱が面白いなあ、ならもつと聞かせてやるよお。その身でしっか

り味わええええええ！」

「な、何をやるきかな神姫君？」

「確かこの空間は何があっても破壊されないんだよなあ？」

「確かにそうだけど本当になにするの？凄く怖いんだけど」

「まあ見てろつてお前が聞きたかった詠唱を」

『始まりあるところに終わりあり、終わりあるところに』

始まりはある、我終焉を求めるもの、この世界に終焉をもたらずもの、我終わりを告

「ああ、余裕でこの世界だったらオーパーツになるぐらいの物作ってやるよ」

「ははは、それ本気でチートだよね」

「まあな、だが私はそこから年月を重ね魔改造するならよろしく」

「君に勝てる人間が知りたい」

「じゃあ帰るわ、転送先は人があまり人がいないところがいいな」

「わかってるよ」

「それじゃあな」

「バイバイ、」

神姫は転移していった

「部屋の片付けどうしよう」

神の部屋は真っ黒だった

準備準備〜♪

トウーン

「え、なにこの転移音○リオじゃねえか」

はい！こちら霧雨神姫です？

私はいま大きな洞窟に転移されました？

いまからすること

自分のISを作ることです

テレテテッテレー

（あーもしもし聞こえてる？神姫君）

「なんだよ神突然の念話なんて」

（あのー僕が転移させるときに少しミスをして時間が少しずれたんだゴメンね）

「まあいいや、どのくらいずれたんだ？」

（それが5年のずれが出たという事でいま君は10歳だ？）

「お前 またワールドエンドぶちこまれたいか？」

（イヤイヤイヤまってまってそれだけはやめて）

「え、なに？俺いま10歳？」

(yes)

「バカヤロウ！なんてミスをしやがった俺の伸長ぜんぜん伸びてないんだぞ」

(あー今なんcmぐらいなの？)

「86・3cm」

(低つ5歳の伸長でもないよそれ)

「うるさい！もういい？俺は今からISを作るんだアアアアアアアアアア！だから一年後また会おう」

一年後

「んーもう一年かあご都合主義って凄い？

さすが小説だあ」

メメタア

(神姫君メタいのはやめようよ)

(で、何のIS作ったの？)

「色々作ったよでもいつかのお楽しみさ」

（君の場合ISなんて必要ないからねIS学園にでも入らないとISなんて使わないだろうね）

「IS学園？なんだそれ？」

（え、知らないの？ IS学園は未来のIS操縦者を育てるための学校さ）

「まあどうでもいいや」

「それよりこれからどうしようかなあ」

（旅でもしたら？）

「そうだな、そうするか」

（僕とはしばらくの間念話出来ないから）

「うん、どうでもいい」

（ひどい！じゃあね？）

そう言つて神は念話を切った

「はあ一年もあつたのに伸長100cmいかなかったな

いまは96cmぐらいだな」

とりあえずどっか行くか

ドオオオオオン

適当に歩いてしていると爆発音が聞こえた

「なんだ？ 昼から花火かよすげえな」

こいつはいつまでたつても能天気である

「最近の科学の発達は素晴らしいからなきつと

昼間でも見える花火が出来たんだろう

俺も見に行こう」

と言つて音のした方に向かった

「なんだ？ 花火じゃないぞ」

「おお、家が爆発してる」

全然驚いていない能天気

「あれはISだな？」

俺はいいことを思い付いたぞ

「俺の作ったISの性能を確かめるための生け贄となるがいいさ」

こいつ…：外道である

「なに使おつかかなー色々作ったからなー

でも顔とかばれたら大変だからなここはフルスキンの機体で行こう」

「来てくれ？ グロス！」

神姫はグロスと呼ばれた機体を纏った

「行こうかグロス」

そう言つて神姫はISの方へと向かった

side?

「祝初めてのside交代!」

あれ?なんだつたんだろう今の電波は。

それよりもいまは緊急事態私たちの家がISに襲撃されている。

いまはお父さんとお姉ちゃん頑張っているけど時間の問題だと思う

いま家にはISがない、この時を狙われたのだろう

一機でもISがあればそんなことを願っていると

遠くから一つの青い影が飛んでくるのが見えた

side 神姫

はいはいどうもーマイク変わりましたー

本作品主人公の神姫です

どうやって搭乗しようかな?

とか考えてる間に着いちやったISって速いよね
でも正直俺より遅いんだ

ISの操縦法は次元で何年か修行したのでバッチリだぜ
よし到着

「二人とも大丈夫?」

ちゃんと声は変えてある

「お前は何者だ」

おおう何かごついおっちゃんの話しかけてきた

何て答えようかな?

「通りすがりの一般ピーポーです」

しまったああああああ緊張しすぎてミスったあああ

「そんなわけないでしょう一旦顔だけ外しなさい」

そんなことを言ってくるのはおっちゃんと一緒に戦っていた水色の髪の外に向
かってピョンとはねている子だまあ俺より年上だろうけど、なにあの髪形、

すげえさわってみたい何あれ、なんであんなに跳ねてるの?

「それは言えないわでもあなたたちの手助けに来ただけ言っておきましょうか」

ふう何か喋り方ムズいな

「オイ！いつまで無視してくれるんだ？コラア！」

あ、あいつカルシウム足りてないな

「ごめんなさい、余りにも小物臭がしたからきずかなかったわ」

「なんだとオラあ！テメエなんてこのオータム様が

ぶっ殺してやるよお？」

「へえオータムって言うんだやっぱり小物臭がするわね」

さてと話してばかりもいられないそろそろ戦うか

「オメーなんてこいつで十分だあ！」

そう言っ取っ出したのはマシンガン

はつきり言おうシヨツポ！

「ならこっちはこれね」

そう言っ取っ出したのは俺が作ったマグナム型レールガン。グロスは遠距離特化型の機体なので武器はほとんど銃だ

「へッなんだその武器はマグナムかあ？そんなもんじゃ俺様は倒せねえんだよ」

へえ言っってくれるじゃないか

「これから始めるのは戦いじゃない私からの圧倒的な蹂躞よ」

これ言ってみたかったんだよねえー

「黙れええええええええ！」

マシンガンをうちながらの突撃悪いとは言わないだが相手が悪い
充電率10%これだけは有れば十分だ

まず俺は瞬間イカニツヨク加速をして

オータムの腹に男女平等キックを放つ

「ぐええ」

おいおい女性がそんな声出してどうする

およそ十メートルの距離が空くそこで俺は

マグナムレールガン二丁

ビームビット「タクト」20機

腰部レールカノン「ハルちゃん1号2号」

胸部圧縮粒子砲「食べ物への恨み」

眼部複合粒子砲「ピッコロの不意討ち」

を全てオータムに向けて発射した

その結果

森が真っ直ぐに無くなりました☆

やべえよ十%で威力強すぎだよ百パーセントで日本吹き飛ばんじやない？

その後あの二人に捕まるのは厄介なので

オータムは記憶を覗いて家に強制転移させた

ISは何となく貰っておいた

その後俺自身も転移した。場所？使った魔法はランダム転移ですが何か？

ランダム転移とは文字通りどこに転移するかわからない魔法であるその代わり行ったことの無いところも行ける

その後

side?

「何処かに行っちゃったねお父さん」

「そうだな刀奈」

「お姉ちゃん」

「ん？簪ちゃん！大丈夫？怪我しなかった？」

「大丈夫だよお姉ちゃんそれより青い人は？」

「ああ、あの人なら何処かに行ったよそれよりも

どうしよう、ハア」

「どうしたのお父さん？」

「森を見てみろ」

「森？森ってなにこれえ！」

私たちが見たのは一直線に森がなくなっている光景でした。

「後始末どうするのよー？」

っってお姉ちゃんが叫んでる

私？私はあの青い人にまた会えないかなあつと思っ

空を見ていました。

おまけ

今回グロスの稼働データは取れた。森を消してしまうなどというハプニングもあつたがとりあえず計画は成功だ。

「次はどんなISを使おうか。ひっひっひっひっひ」

次は多分、いきなりIS学園入学だよ？（仮）

勝てばよかろうなのだ？

時は過ぎて何年か経った

俺は今旅をしています。

あのあと色々なことがわかったどうやらあの日俺が助けた家は更識家と言いつつ暗部用暗部の家らしい。

まあそんなことをどうでも良いけどね！

俺が回収したISは新しく生まれ変わらせた

いつ使うかはわからないが…

まあそんなことは置いておいて

今俺はドイツにいます！

理由？フツフツそれは今ドイツでは

ISの世界大会第二回モンドグロツソが開催されているのだ？

それを見に来たんだよねえー

優勝候補は織斑千冬と言う日本人だ

顔をみたらビックリあのととき白騎士に乗っていた人ではありませんか
そりや勝てるでしょ！Sが生まれたときから乗ってるんだから。

そんなわけでもうすぐ決勝戦が始まる

俺は暇だなあーと会場をうろついていた

そんなときだ

「は、放せえ！」

何か声聴こえたんだけど

俺は声かした方に歩いていった↑（いや走れよ）

そこでみたのはなんと！

車に一人の少年が乗せられている光景でした

「あれって誘拐じゃね？」

うおーすげー生誘拐だ写真写真！

「とか思ってる場合じゃ無いよな」

俺は車が走っていった方に走り出した

とりあえず自分に魔法をかける

「インビジブル」

コレで周りからは俺の姿は見えない

俺は車を追いかけた

side少年

突然だが俺は誘拐された

今日は俺の姉の試合を応援しに会場に来ていた

だが突然後ろから声を掛けられ

振り向いた瞬間に殴られた。

相手は俺が倒れてる隙に俺の手と足を

拘束し車に乗せた。

という事で今俺は倉庫っぽいつとこに横たわっている

このままでもいけないので俺は誘拐犯に話し掛ける

「なんで俺を誘拐したんだ」

「へッ決まってるだろお前の姉を決勝戦に

出させないためだよ」

「狙いは千冬姉か」

「安心しろ、全部終わったら返してやるから」

くう、俺はいつまで経っても千冬姉の足手まといか。

そう思い悔しさに涙を流しているときに

倉庫の扉が開いた

s i d e 神姫

ういーすみんなの主人公神姫どうえーす！

すいません調子乗りましたごめんなさい

てなわけでやっとなつたよ

目の前には倉庫みたいな建物があるとりあえず神眼で

中にいる人数を確かめる

「少年と誘拐犯が四人か、ん？少し後ろから

凄いスピードで何かが近づいてくるな、多分少年を

助けに来たんだろう。それなら俺がやることは

「一つだな」

そう思い扉を開ける

中にいる人達に一言

「ちいーつす三河屋でえーつす」

・・・

空気が死んだアアアアアアアアア

しまったああああああああ完全に登場の仕方

ミスったあ、みんな俺を痛い目で視てくるよ

少年すら哀れみの目を向けてきてるよ！

「えーゴホン！そ、そこまでだお前ら！

今すぐ少年を解放するんだ！」

とりあえず空気の立て直しを図る

「お前みたいなお子供に何が出来るんだよ？」

「そうだ！俺のことは良いから速く逃げろ！」

お前まだ8歳ぐらいだろ！」

そうだ今の俺の伸長はあのと時から少し伸びて

114cmぐらいになっている

そして少年うるさいぞお前を助けに来たんだこっちは
お、あつちはあと30秒位で此方に着くな

俺はそれまで時間稼ぎだ

「うるせえ良いからかかってこい

誘拐犯！」

「うるさいクソガキ！お前ら！

やっちまええ！」

そう言つて 誘拐犯達は俺に向かつて拳銃を打つてきた

だが無駄だ！

「ベクトル変換！」

俺はあの有名な一方〇行の力を使い拳銃の弾を

跳ね返すそして誘拐犯達に被弾

「ぐああ！なんだ今のは！弾が跳ね返ってきただど!?」

フッフ驚いてる驚いてる

よしっあつちは到着したな

俺は走つて少年の元に駆け寄る

「もう大丈夫だぞ」

「何がだよ？」

「助けが来た」

ガララ

少し開いていた扉が大きく開き中に一つの鉄の塊が入ってきた

「一夏あああああああ！」

鉄の塊に乗っていた人物はそう叫び誘拐犯達をなぎ倒した。

その後警察が来て全てが終わった

俺はそこから立ち去ろうとした

「インビジ 待て」

逃げゲフンゲフン立ち去ろうとした瞬間に声を掛けられた

「なんですか？」

「いや、弟を助けてくれた礼を言おうと思ってな

弟を助けてくれてありがとう」

「いえいえ俺はなにもしてませんよ助けたのは

あなたではないですか」

「最終的には、だ。お前は私が来ることを知って

私に来るまでの時間稼ぎをしていたんだらう？」

なん…だと…

この人にはバレているようだ、だけど俺は

あえてしらを切る

「なんのことですか？俺はただ単に弟さんが倉庫の中に連れてかれるのをみて飛び込んだだけですよ」

「ふっ、そういうことにしておこう。」

もう時間も遅い、君の家族の元に連れていこう

家に案内してくれるか？」

「俺に家はありませんよ俺はずっと旅をしていますからね」

「なに？嘘はやめてくれ君はまだ小学校の下級生だろ？」

さあ家を教えてくれ」

「いやいや俺はもう13歳だぞ学校にいったらもう中学1年生だ」

「(; ;)」

何か二人とも啞然としている

「それは本当か？だとしたら旅をしているとゆうことも」

「ええ、本当ですよ」

女性は数秒間考え込むそしてなにかを決心したように

こちらを向いた

「なあ、お前私たちの家族にならないか？」

パドゥーン？

「え、今何て言いました？」

「いやだから私たちの家族になつてうちに住まないか？」

と言ったんだ」

「なんでそんなことを？俺が増えれば家の負担が

多くなるはずだなのになんでそんなことを？」

「いや、負担なんてどうでも良いんだ

ただ私たちも姉と弟で二人暮らしでな、確かに負担は

増えるがなんとでもなる。

私は私たちのように家族がない人をあまり見たくないんだ。だから私たちの家族になつてくれないか？」

俺は考える

この人の家族になる

II

安定した生活

II

平和な生活！

「なります！ぜひ家族にさせてください！」

実は旅の途中には戦いだらけだったからね

謎の組織を潰したりI Sを使ったテロを鎮圧したり

他にも色々：全然平和じゃなかったんだ

そろそろまともな生活がしたかったし

毎回戦う度にグロスを使ってたら

裏の世界では蒼き彗星とか言われるようになった

シ○アじゃねえよ

そんな厨二臭い名前がついてしまい

もう戦いたくないなあ

と思い始めた矢先にこれだ

飛び付かないわけがない

「あ、ああ何故いきなり素直になったかはまあ良しとする。これからお前は私たちの家族だ。」

お前も良いか一夏？」

「ああ良いぜ俺も家族が増えるのは嬉しいしな♪」

「とゆうことだこれからよろしくな」

まず自己紹介をしよう私は織斑千冬だ」

「俺は織斑一夏だぜ！ちなみに年は同じだ」

「俺は霧雨神姫だ」

「ならお前はこれから織斑神姫だ」

ん？名字が変わったな読者の皆さんがいきなり過ぎて困っているだろう

(メタいよ神姫君)

なんだか今神の声が聞こえた気がする

まあどうでも良いや

「うん！これからよろしく！千冬姉さん！一夏！」

これから平和な世界を楽しむのだから

あれ？これフラグ？

汝はチートなりや!

「見ろ、ここが今からお前の家だ」

そう言われてみた家は普通の一軒家だった

表札には織斑と書かれている

「良い家だなあ」

これは素直な感想だ

「そうだろう、まあ家事全般は一夏に任せているがな」

成る程この人は家事が出来ないな

見た目は良いのに残念な人というわけか

「神姫、今失礼なことを考えなかつたか？」

ビクウ

「いえ！なにも考えておりません!!」

「まあそういうことにしておこう」

なんなんだこの姉はエスパーか？

「明日は神姫の中学校への編入手続きをしに行くぞ」

「え、俺学校に行くの？」

「当たり前だろう、お前はまだ13歳なんだ、

学校に行くのが普通だよ」

「そこまでやってくれるんですか」

「当然だお前は私たちの家族なんだからな」

その言葉に胸がジーンとなる

あれ？目から汗が

「そんなことより神姫！早く中に入ろうぜ！

千冬姉も！」

汗が引つ込んだ、リニアもビックリなスピードで引つ込んだ、一夏め、俺の感動を帰

せ

そしてお前は土に還れ

「そうだな、俺も早く中に入りたいよ」

怒りを押し殺し俺は笑顔で言った

「よし、では中に入ろうか」

千冬姉さんがそう言った

ここから俺の新たな生活が始まった

二年後

俺たちは電車に乗っていた

この二年間は本当に楽しかった

学校に転入して間もなく俺には親友というものができた

五反田ごたんだ 弾だん

御手洗みたらしい 数馬かずま

鳳フアン 鈴音リンイン (通称鈴)

だ。

元々一夏の友人だったので友達になれたとゆうところだ

その三人と一夏をあわせ五人で

とにかくよく遊んだ

あるときは教師にイタズラをし

あるときには学校の運動場にミステリーサークルを

書いた

極めつけには千冬姉さんの部屋盗撮作戦が行われた。

撮る前に千冬姉さんにみつきり五人揃って

ボコボコにされた

だが2年の終わりがろ鈴が転校した

実際には母国である中国に帰った

そして三年生

みんなは勉強に集中している

なぜかって？受験だからさ

まあ俺は勉強は余裕過ぎるほど余裕なので

心配はないが

生活費を稼ぐとゆうことでバイトをしていた一夏は

ヤバかった

俺もバイトをしているが

俺は一夏に時間が有ればとにかく勉強を教えた

そのお陰か一夏は中学校最後のテストで

学年5位をとった

俺？満点一位ですが何か？

そして今に至る

俺達が電車で向かっているのは

私立藍越^{あいえつ}学園の受験会場

なぜその高校を選んだかと言うと

卒業したあとの就職がとても楽で

学費も安いというのが理由にあげられる

俺たちの合格率は90%を越えているため

まあ大丈夫だろうと思う

そして受験会場である多目的ホールについた

ついたのはいいんだが

「神姫、どこどこだ?」

「一夏、俺に聞くなよ」

はーい絶賛迷子デース

「よし!次にあった部屋に入ろう!!」

「それやってこのまえ一夏女子更衣室だったじゃん」

そうこいつは少し前にこれをやって女子更衣室の

扉を開けたそのくせに一夏は変態扱いされず

その時一緒にいた弾が変態と言われた

その事が弾の妹五反田^{ごたんだ} 蘭^{らん}にも伝わり一週間口を聞いてくれなかったそうだ

弾哀れ

強く生きてくれ

「う、うるさい！あれはミスだったんだ今度こそ」

ガチャ

そう言つて一夏はドアを開けた

「あー君、受験生だよ、ならさっさと向こうで着替えて。急いであるからなるべく早くね。」

そう言つて何処かに行つてしまった

「何だ？最近の受験は着替えるのか？」

「カンニング対策じゃないのか？」

一夏さすがにカンニング対策じゃないだろ

「まあいいや一夏、さっさと入ろうぜ」

「そうだな」

俺達は奥に入っていく

奥にあつた一つの扉を開ける

そこにあつたのは

「なあ神姫、これってISだよな」

「そうだろうな」

IS

インフィニットストラトスと呼ばれる

宇宙空間での作業を主とした

マルチフォームスーツ

だがその性能に目をつけた大人たちは

本来の目的など知ることかと言うように

ISを『兵器』として扱い今ではスポーツに落ち着いている

はたして製作者は今をみて何を思っているのだろうか

それは俺でもわからない

だが俺は1度ISを改造し宇宙へと行った

宇宙には俺もいったことがなかったので

凄いわくわくしていたのを覚えている

行けたのは月だけだったがそれでも宇宙は凄いと

思えた

ついでに月には

『神姫参上!』

と書かれた旗を突き刺してきた

以上 I S の説明終わり

「これ男には動かせないんだよな」

そう言つて一夏は

I S に触れる、すると

ピカーン

I S が光だし次の瞬間一夏は I S を纏っていた

その時俺は思った

あー絶対これ原作だろ、と

「一夏すげえなー I S を動かせるなんて

マジすげー(棒)」

「すごい棒読み感が伝わってくるぞ」

ガチャ

一人の女性が入ってくる

「誰だー I S を勝手に動かしたやつは!」

すると一夏は律儀に

「あ、はい俺です」

と答えた

「何? 男が I S に乗ってるだと! 大変だ

今すぐ政府に連絡を!!」

女性 は 携帯 を 出 して 連絡 を と る

「なあ神姫、俺はどうすればいいんだ?」

「とりあえずこのまま待てば良いと思うよ」

「わかった」

五分後、部屋に色々な人が入ってきた

「本当だ! 男が I S に乗ってるぞ!」

あ、これはめんどくさいことになったな

まあ I S を 動 かし た の は 一 夏 だ し

俺は関係ないから全部一夏に押し付けて俺は帰ろう

そう思っておれはそそくさと部屋から出ようとする

「あ! おいまたて神姫! 俺を置いてくなよ!」

ヤバイ! 見つかった!!

「おれは I S を 動 かし て ね え し 関 係 ない から

じゃあな一夏、頑張れよ」

今度こそ部屋を出ようとする

だがしかしまたもや

「君！君もI Sに触れてみてはくれないか？」

そんなことをいつてきたのは白髪のO Z I S A N

「嫌ですよめんどくさい」

おれはそう言つて逃げようとする

一夏はすでにI Sを解除している

「良いから触つてくれ!!」

そう言われて無理矢理触らされた

すると

ピカーン

I Sが反応した

はあ、だからイヤだったんだ

絶対反応するとわかっていたから

俺はこれからのことを考えて

ため息しか出なかった

俺の平穏な生活が終わった

学園生活（笑）

side 一夏

「全員揃ってますねー、それではS H Rを初めますよー」
ショートホームルーム

黒板の前で微笑みながらそう言ったのは

副担任こと山田真耶先生

最初見たときはこれが先生？って思った

かけているメガネは若干ズレていて

服もサイズがあつていないのかだぼつとしている

なんだろうこの人、高校デビューならぬ

先生デビューしようとしたのかな？

それならば山田先生、デビュー失敗してますよ

「それでは皆さん、1年間よろしくお願いしますね」

「……………」

え、なんで無言なの？とゆうよりなにこの

緊張感そしてこの重い空気は、でもなあそうだろうなあ

なんてったってクラスのみんな俺以外みんな女子だもんな

くそう神姫め、あいつ家を出る直前で腹が痛いとか

言いやがって、なんで俺一人でこんなところに来なくちやいけないんだ

この恨みいつかはらしてやる

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。出席番号順で」

あから順に自己紹介が始まる

（これは想像以上にきついな）

クラス全員からの視線が集まっているのがわかる

ちなみに俺の席は

女女女女女

女女女女女

女女女女女

女女女女女

女女 女女

女女俺女女

教卓

だ

多分俺の後ろが神姫なんだろうなあ
そんなことを思っているよ

「…くん…織斑一夏君！」

「は、はいっ！」

おお、思わず変な声が出してしまった

見てくれみんなクスクス笑ってるよ

みんな知ってる？

人ってそうゆう笑い方がいちばん心にダメージが来るんだよ？

「大声出しちゃってゴメンね？、怒ってる？怒ってるかな？でもね、今自己紹介がね？あから始まっていまお

なんだだからね？自己紹介してくれるかな？

ダメかな？」

なんなのこの低姿勢デス〇ートのエ〇もビックリな

低姿勢だよこれが先生で大丈夫なのか？

そして本当に俺たちより年上なのか？

そういった疑問を心の奥にしまい俺は答える

「大丈夫です、自己紹介しますから

そんなに謝らないでください、そして先生落ち着いてください」

「本当に？本当ですね？約束ですよ、絶対ですよ」

だからなんなんだこの人の低姿勢は

そう思いおれは席を立ち振り返る

うわっこの視線は辛すぎる！

この状況弾なら喜びそうだな

「織斑一夏です、よろしくお願ひします。」

・
・
・

え、なにこれ？もつと言つて欲しいの？

そんなことを言われても言うことないよ？

どうしろというんだ俺に

よしっここはもう終わらせよう

「い、以上です！」

ガタガタ

クラス全員が一丸となった、うん団結力があるのは良いことだ。

スパアンツ

「痛えー!？」

おれは後ろを振り返る

そこには

「げえつ、関羽っ!?!」

スパアンツ

また叩かれた、ひどい俺の頭がどうなっても良いのか

「貴様の頭などどうなっただって知ることか

自己責任だ」

なにこの人エスパーかよ

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか?」

「ああ、山田君クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたね」

何ですかねその優しい声は俺は聞いたことないよそんな声

あれ? 目から汗が

「いえいえ、私は副担任ですから、これくらいのことはいらないと」

と山田先生は熱っぽい視線を向ける

「諸君、わたしが担任だ、君たちを1年で使い物になるように育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、

よく理解しろ。出来ないものには出来るまで指導してやる私の仕事は若干十五歳を

十六歳まで鍛え上げることだ

逆らっても良いが私の言うことはよく聞け

いいな。」

なんとゆう暴力発言これこそ

俺達一年一組の担任であり

俺と神姫の姉織斑千冬だ。

s i d e 神姫

どうもー神姫でーす

ちくしよう一夏め

あいつだけで分量とりやがってばかやろう

てなわけで今俺はモノレールに乗っていまーす

しかも一人で（シクシク）

なぜかと言うと学園にいく直前で

急激な腹痛が来てしまったため

一夏に

俺のことは良い！先に行け？一夏あああ！

みたいな死亡フラグ発言をしたあと

30分ぐらいトイレで格闘してました

ふええ完璧遅刻だよお

だがそんなことは気にしないのさ

と、思っていた時期が僕にもありました

学園に着いたー、と思っていると

校門には黒い魔王、もとい我が姉織斑千冬が

「遅いぞ馬鹿者、遅刻だ何をやっていた？」

「は、はいいちよつとお腹がいたくて

少しトイレに」

「とゆうよりなんでここにいるんだよ千冬姉さん！」

スパアーンツ

「いってて」

「良いか？ここでは織斑先生だわかったか？」

織斑弟」

「イエス！マイ！マム！」

逆らつてはいけないそう思うほどあの人はヤバイ

まるで一匹のアリがライオンに襲われるように

スパアーンツ

「貴様、今失礼なことを考えただろう」

「そ、そんなことないに決まつてるじゃないですか

なにをおつしやるんですか織斑先生つたらー」

ギロツ

「はい、すみませんでした考えてました」（土下座）

ここから織斑先生の恐怖政治は始まった

場所が代わり今は1年一組の教室の前でございます

すごいね千冬姉さんつて

姉さんが入つてすぐに

黄色い声援が飛んできたよ

なにこれちよつとしたアイドルじゃないか

あ、また一夏叩かれてる

ザマア

「おい、そろそろ入ってこい」

そういわれたので教室に入る

「織斑弟、自己紹介をしろ」

さて、なにを言おうか迷うなあ

でも一夏みたいな失敗はしたくないからなあ

よしっこれでいこう

俺は教卓の前に立つ

「オッス、オラ神姫」

・・・

・・・

・・・

空気が死んだアアアアアアア

え、なにこれデジャヴ？

なんなの俺ってマジKYじゃんえ、俺っていつのまにか

空気を殺せるようになったの？

エアブレイカー
空気殺してなんかかっこいいけど

実際にはただスベっただけだからね

（テツテレーシンキハエアブレイカーヲオボエタ！）

うるせーよ神、久々の言葉だからって調子乗るなボケ

スパアンツ

「イテツ」

「イテツじゃないわ馬鹿者真面目に自己紹介をしろ

愚弟」

ひどいこれが愛する弟への仕打ちか

「わかりましたよ織斑先生」

今度は真面目に自己紹介をする

「初めまして織斑神姫です、名字でわかるように

織斑先生と一夏のきようだいで弟です

こんな伸長ですがちゃんとした高校一年生なので

自然に接してくれるとありがたいです」

現在神姫の伸長 134 cm

「なお、特技は家事全般、趣味はプラモデルを制作することです、これからの1年間よろしく願います」

うん真面目にできたと思う、すると

「キ」

ん?キ?

「キヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤー!!」

「ギヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤー!」

クラス的女子からの歓声

俺達二人はあまりの声の大きさに耳を塞ぐ

「小さくてカワイイ!」

「一組のマスコットは決まりね!」

「兄はかつこいい、弟はカワイイ、最高ね!」

などという言葉を多数いただきました

それにしてもなあ俺も男なのになあ

カワイイって言われると複雑だよ

「静かにしないか馬鹿者ども!!」

シーン

すごい一瞬で静かになった

これが鶴の一声

「これでSHRをおわる、解散！」

これからどうなるんだろうな

そう思いながら俺は自分の席に歩き出した

なぜフラグが立つのか。それはあなたが主人公だからです

「神姫、どうだった？ 一時間目？」

そんなことを聞いてきたのは俺の兄、一夏である

「どうだったって、別に簡単だったぞ」

「嘘だろ？ 俺は全然まったくさっぱりだ」

我が兄のアホさにあきれる

IS学園は入学式の日からいきなり授業がある

なんてひどいんだこの学園は

ていうか一夏、まだISの基礎理論だぞ

そんなことでつまずいていたらこの先ヤバイぞ

「ちよつといいか？」

そう言われ振り向いた先には

ポニーテールの女の子がいた

「どうしたんだ？ 箒？」

どうやら一夏の知り合いみたいだ

しかもその子の顔は少し赤い

この表情は中学のとき他の人もしているときがあった

そして大抵この顔をしているときは話しかけた方に

惚れている。

結論

この子は一夏に惚れている

本当にイケメンって

死ぬべきだと思うんだよね

しかもこの兄は超鈍感である

中学のころ一夏に告白をしている子は何人もいた

だって一夏モテるんだもん

その度に一夏は

「わかった、じゃあすぐ行くこうぜ、買い物」

って言うんだ

そのあと毎回告白した子は泣いて

その場を去る

そのあと告白の現場を見ていた

俺と弾と数馬は毎回その子の

アフターケアをすることが俺たちの役目となっていた

一夏死すべしリア充は滅びれば良い

おおつと話がそれた

「一夏に用事なんだろう？俺はその子知らないし」

「ああ、紹介するよ、俺の小学校の頃の幼馴染み、

しののほののほうき
篠ノ之 箒だ」

「篠ノ之箒だ、箒で構わない」

「よろしく、箒さん、自己紹介はしたと思うけど

織斑神姫だよ。神姫って読んでね」

「ああ、よろしく神姫」

ここに一つの友情が生まれた

「ところで、一夏を借りていきたいのだが」

「良いよ別に、こんなのならいくらでも借りていってくれ」

「ひでえな神姫！これでも兄だぞ」

自分でこれでもって、わかってるじゃないか

自分がどれだけ不甲斐ないかを

「うるさい一夏、とにかく行ってこい」

「神姫も来いよ」

ピクッ

箒さんの体が反応する、この唐変木め

「いや、めんどくさいからいい、その代わり

箒さんに俺のことを教えてあげてくれ」

「うーん、わかった神姫がそれでいいならまあいいか

なら箒、さっさと行こうぜ！放課が無くなる」

「わかった、行こう」

教室を出ようとする箒さんに一言

「箒さん、ごゆっくり」

「な／＼／＼！なんのことだ！／＼／＼」

おお分かりやすい分かりやすい

「さあね、それより早く行った方がよいよ」

「わ、わかってる！」

箒さんは教室を去っていく

俺は一人になった

べ、別にさびしくなんてないんだからね！

ほ、本当だよ！

……シクシク

うんこんなどこには寝ればいいのさ？

そう思つて俺は机に伏せた

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴る

それと同時に俺は起き上がる

まだ一夏は戻ってきていない、あれ？ 箒さんは

戻っている。あ、一夏が帰つて来たまた千冬姉さんに

叩かれてる、ザマア

「であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり」

教科書を読んでいく山田先生

なんかあたふたしてる一夏

はつきり言おう一夏、目障りだ

これ絶対一夏わかつてないよね？

まあ俺もあまりわかってないが

なぜかとうとうと俺は I S の技術的な面では

I S を開発した筈しののさんの姉篠たばねノ之 束たばねより上だろう

でも今やっているのは I S の知識的な面だ

それについては俺はまったくと言って良いほど

わかっていない。

入学する前に知識に関する分厚い本をもらったのだけど

あの本は・・・

「織斑くん、なにかわからないところがありますか？」

「はい？」

「あ、ああ一夏くんなにかわからないところがありますか？」

なんだ俺じゃないのか

「先生！」

一夏が叫ぶ

「はい！」

先生もつられた

「ほとんど全部わかりません！」

あ、自爆した、ここには千冬姉さんもいるんだぞ！

「えっと、全部ですか？」

先生顔がひきつってますよ

「い、一夏くん以外で、今の段階までわからないっていう人はどれだけいますか？」

拳手を促す山田ティーチャー略してヤマティー

スッ

俺は素直に手を挙げる

おい、一夏やめろその「おお、お前もか」みたいな

顔するの

「織斑兄弟、入学前の参考書は読んだのか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

素直に答える一夏

スパアンツ

「必読と書いてあつただろ馬鹿者」

アツヒヤツヒヤツ怒られてやがんの

「織斑弟、貴様は読んだのか？」

マズイ！これは下手に答えれば出席簿をくらつてしまう

どうすれば、よし！この言い訳ならなんとかなる！

「えーっと、参考書に足が生えて歩いて行きました」

（読んだんですけど、緊張しちやって忘れちゃいました）

しまったあああ！逆だよ！すっかりしろよ俺え！

ちなみに足が生えて歩いていったのは本当だ、

何となく参考書に生命を与える魔法を掛けたところ

何故か足が生えて窓から逃げてしまった

今はもう魔力が切れてただの本になって落ちていると思うが

「何を言っているんだ貴様は？言い訳ならもつとましな

言い訳をしろ！」

スパアンツ

叩かれた、我々の業界ではご褒美……そんなわけないだろう

ヤバイメチャクチャ痛い

普段なら出席簿のほう折れるのだが

今の俺は日常生活に支障が出るので

身体能力を千冬姉さんと同じくらいに抑えて

リミッターをかけている

というとは千冬姉さんもこれをくらえば
いたいとゆうことか、なるほどーっわかったぞ

「お前ら二人には再発行してやる、一週間で
覚えろ、良いな？」

「いや、あの量を一週間はちよつと」

「やれと言っている」

「わかりました」

一夏強引に論破される。それは違うよ！

なんちゃって

スパアンツ

「織斑弟、くだらないことを考えるな」

「……………はい」

なぜこの人は考えてることがわかるのか？

もしやこれが！ブラコンの力とゆうものなのか！

ズパアンツ

「余計なことを考えるなど言っただは、ずだ」

「すみませんでした」

いてえ、さっきの二倍ぐらいの威力で叩かれたぞ

「ISはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遥かに凌ぐ。そういった兵器を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。

理解が出来なくても覚える。そして守れ。

規則とはそういうものだ」

なんだろうう久々に千冬姉さんから正論を聞いた気がする

「貴様、自分は望んでここに居るわけではないと思っっているだろう？」

あ、一夏が反応した、凶星だな

「望む望まずに関係なく、人は集団の中で生きていかなくはいけけない、それすらを放棄するのなら、

人であることを辞めることだな」

なるほど、簡単に言えば現実を見ろって訳か

それにしてもひとを辞めるってか

俺はもうほとんど人じゃないけどね！

「えつと、一夏くん、神姫くん、わからないところがあるなら放課後教えてあげますからね？だから諦めないで。ね？ね？」

授業はこうして終わっていく

「ちよつとよろしくて。」

「へ？」

あ、ハモった

授業が終わり二時間目の休み時間俺は一夏と雑談をしていた、そんなときに

後ろから声をかけられた

「まあ！なんですよ、そのお返事。」

わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから

、それ相応の返事というものがあるのではないのかしら？」

俺は思った、コイツ超嫌い！

一夏を見るとあいつも少し嫌そうな顔をしていた

ISが世の中に出回ったことで起こったことで

できた風潮、女尊男卑だ

基本的にはISは女にしか使えないそこで

政府が行った政策が女性優遇政策だ

まったくいつだって政府は腐っているな

その政策のせいでは

女性≡偉い ということになっている

町を見れば男が女にパシリにされている光景などは

珍しくない

以上

女尊男卑の説明終わり

「悪いな俺、君誰だか知らないし」

「同感」

とりあえず一夏に合わせる

だって本当に知らないんだもん！

遅刻したんだもん！

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？」

イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを？」

ええ、知りません知りたくありません

「あ、質問いいか？」

「ふん、下の者の要求に答えるのも貴族の務めですわ。
よろしくてよ」

「代表候補生ってなんだ？」

シーン

空気が死んだ

お、遂に一夏も空気殺しをさせるようになったか

「あ、あ、あ、」

「あ?！」

「あなた！本気でおっしゃってますの!?!」

ヤバかった俺も代表候補生なんて言葉知らんもん

「おう、知らん」

一夏、君の素直さは俺も尊敬するよ

「信じられませんわ、極東の島国というのは、

こうまで未開の地なのかしら。

常識ですわよ常識。テレビがないのかしら」

ひどいテレビくらいあるぞ

しかもなんだよ極東って○ツドイーターじゃないんだから日本で良いじゃん
「で、代表候補生って?」

「国家代表 I S 操縦者の、その候補生として選出されるエリートのことですわ」

へえーこんなんでもエリートかあ

「すごいんだなセシリアって」

初対面のひとをいきなり名前呼び捨てなんて

すごいのはお前だよ一夏

「そう！エリートなのですわ?」

だめだエリートって聞くとべ○ータが出てくる

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、

クラスを同じくすることだけでも幸運なのよ。

その現実をもう少し理解していただける?」

ハイイワタクシ、リカイシマシタ

「そうか。それはラツキーだ」

「馬鹿にしていますの?」

何でだろう、女性って理屈が通用しないのかな?

「大体、あなたたち I S についてなにも知らないくせに、

よくこの学園に入れましたわね。世界でたった二人、男で I S が操縦できると聞いていましたから、

すこしくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はずれですわね。」
うるさいぞ、I S の操縦ならお前ごときには余裕で

勝てるわ

「俺達になにかを期待されても困るんだが」

おい、愚兄俺も巻き込むんじゃない

「ふん、まあでも？わたくしは優秀ですから、

あなたたちのような人間にも優しくしてあげますわよ」

あれ？俺今まだ一言もしやべってないのに

一夏と同類にされたよシクシク

「I S でわからないことがあれば．．．まあ．．．泣いて

頼まれたら教えて差し上げててもよくつてよ、

何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートなんですから」

それは教官が弱かったのかな？「入試って、あれか？

I S を動かして戦うやつ」

それ以外に何があるというんだ

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

「は？・・・」

ああ、確か一夏がいったな始まって直ぐに

教官が突撃してきて壁にぶつかって試合が終わったんだっけ？

え、俺？相手が織斑先生でしたが何か？

お互い日本の第2世代のIS打鉄を纏って

戦った、さすがにリミッターをかけていたから

少し苦戦したが何とか勝つことができた

ちなみに千冬姉さんにはおれがISの専用機を持つていることを伝えてある。

「わ、わたくしだけと聞きましたか？」

「女子ではっていうオチじゃないのか？」

「つ、つまりわたくしだけではないと」

「まあまあ落ち着けて」

「これが落ち着いてられますか！あなた！あなたはどっただったんですの!？」

そう言っつて俺を指差してくる

「おっしえなーい」

「あなたねえ？」

キーンコーンカーンコーン

「ほらほらオルコットさんチャイムが鳴ったよ、

千冬姉さんの出席簿アタックをくraitたいの？」

なんか俺久々に話した気がする

「また後でできますわ！覚えておきなさい？」

やべえ、オルコットさん、今の一言で

完全に嘔ませ犬だよ

今は三時間目の授業、教卓には千冬姉さんが

たっている、めずらしい

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

生徒と同じように山田先生もノートをとっている

うんうん、勉強するのは良いことだよ

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦

にでる代表者を決めないといけないな」

ええそんなのあるの

「クラス代表者とはそのままのいみだ、

対抗戦だけでなく会議への出席、先生の雑よ：ゴホン！

手伝いなどをするまあ、クラス長だな、誰か立候補者はいないか？」

いやいや誰も雑用って言われたあとに手を挙げるやつなんていないよ

ざわざわ

クラス全体がカ○ジになってる

シャツフルやー！ なんちやつて

「はい！織斑：一夏くんを推薦します！」

「私も賛成です！」

「私も良いと思いまーす」

ドンマイだ一夏頑張れ

「つて俺かよ！」

「織斑兄、邪魔だ席につけ」

「ちよつと待った千冬姉！俺はそんなのやらないぞ！」

スパァンッ

「織斑先生だ馬鹿者」

「ちなみに、自薦他薦は問わないぞ」

千冬姉さんがそう言った瞬間一夏の目が光った

「そうか！なら俺は（チョンチョン）ん、なんだよ神姫

」

俺は一夏がやろうとしたことを察したそして

「一夏、一夏は弟を売るのが？」

イチカニキュウヒャクノダメージ

「くっ、でもな神姫、男には、男にはやらなきやいけないときもあるんだよおお！」

「織斑先生！俺は神姫を推薦します！」

やりやがった！コイツ！弟を売りやがった！

「織斑先生、これって拒否権は？」

「貴様、あると思ってるのか？」

悪魔だ、最悪だ

「待ってください！納得がいきませんわ!!」

噛ませ犬、☆降☆臨☆

「このような選出は認められません！大体ー」

なんか言い始めたので聞き流す

なんか屈辱を1年間味わうーとか

クラス代表を極東の猿にされては困るーとか

それにしてもまた極東って言ったな

オルコットさんどんだけ好きなんだよゴッ○イーター

「イギリスだって大してお国自慢なんてないだろ。

世界一マズイ飯で何年覇者だよ」

うわっ一夏のやつ言いやがった！

火に油を注ぐな愚兄！

「なっ！」

ほらほらオルコットさん顔真つ赤だよ

フジヤマボルケイノ、違うか。

「あつ、あなたたねえ!!わたくしの祖国を侮辱しますの!?

」

うわーこの人沸点低いよー

「決闘ですわ!!」

え、何で?

こっち侮辱される

一夏侮辱しかえす

II

決闘ですわ!!

II

Why?

え、何で? 何でそこから決闘に繋がるの?

神姫くん、わかじゃないや。

「おう、良いぜ。四の五のいうより分かりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたら

わたくしの小間使いーいえ、奴隷にしますわよ」

一夏が奴隷、それはそれで面白そうだ

「侮るなよ、真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

あーなんか下らなくなっていたなよしっ寝るか

神姫睡眠中

キーンコーンカーンコーン

俺は起きる(目覚めよ、神姫いいいいいい)

神、がなんか言ってきたが無視しよう

「それでは、一週間後の月曜日、オルコットと織斑兄

と織斑弟の決闘をするそれぞれ用意をしておくように」

あれ？いま織斑弟って言わなかった？

「織斑先生、いま決闘に関係無い人が混ざってたんですけど」

「織斑弟、この決闘は実質のクラス代表決定戦だ。

お前は推薦されたんだ、でなければいけない、

異論は認めん」

そ、そんなあ

「わかりましたよ！やれば良いんでしょ！や・れ・ば！」

こうなったら一週間後、オルコットと一夏に

地獄を見せてやる

フーハツハツハツハ！

ハアめんどくさ

これは決闘ではない、八つ当たりだ

「も、もうだめだ」

そんなことを言ったのは

マイブラザー織斑一夏だ

「何がダメなんだよ」

「神姫は授業内容わかってんのかよ？」

「当然だろ？まだ最初だぜ？わからないほうがアホだろ」

「そ、そんなあ」

落ち込む一夏、いいきみだ

「あ、二人とも、まだ教室にいたんですね。よかったです」

素晴らしいながら山田先生が教室に入ってきた

「山田先生、何か用ですか？」

「ええつとです、寮の部屋が決まりました。」

そうやって俺達に寮の鍵を見せる

IS学園は全寮制だ、なんか将来有望なIS操縦者を

保護するとか何とか

「俺達の部屋、まだ決まっていけないんじゃないですか？」

一夏が復活した

確かに入学する前、家にI S学園の教師が来て

まだ部屋が決まっていけないので一週間は

自宅から通ってほしいと言われた覚えがある

「そうなんですけど、事情が事情なので

一時的な処置として部屋割りを無理やり変更したんです

……その辺りのことって政府から聞いてます？」

ハーイマツタクキイテマセーン

でも政府は来なかったけど研究者とか来たな

なにやら遺伝子を調べさせてくれとか

どっちかで良いから解剖させてくれ、いいかな？

とか

いいわけないだろ、そんなことを言ってきたやつらは

寝るときに必ず悪夢が見れる魔法を掛けておいた

「という訳で一ヶ月後もすれば個室のほうか

用意できると思いますので、今は相部屋で我慢してください」

「あ、でもですね！何と今用意できた部屋の片方は個室なんですよ！

だからどちらか一人が個室に住むことが出来るんです！」

俺達はお互いを見合う

そして一言

「俺が個室な！」

フフフ一夏よ、言うと思っていたぞ

だがそんなことは予想済み

俺は！秘策を発動する？

「一夏、クラス代表に俺を推薦したのは誰だっけ？」

「そ、それは」

「俺が対抗戦に出なきゃいけないなくなったのは誰のせいだっけ？」

「お、俺です」

「俺は人に迷惑をかけたならそのぶんの責任を

取らないといけないと思うんだよね」

「仰る通りです」

「なら一夏？部屋、譲ってくれるよね？」

「わかりました」

計画通り（ニヤツ）

「という訳で山田先生、俺に個室の鍵を下さい」

「は、はい」

「あれ？でも神姫俺達荷物は？」

「それなら心配要らん、私が手配をしておいた

ありがたく思え」

織斑先生登場！

登場曲ターミネーター

デデンデンデンテン デデンデンデンテン

「織斑先生、有難うございます」

「まあ、生活必需品だけだがな、着替えと

携帯電話の充電器があれば大丈夫だろう？」

「は、はい」

決しているいえとは言えない一夏ドンマイ

俺の荷物は、千冬姉さんに持ってきて貰ったものと

別に次元の中に入っている

魔法って便利

「じゃあ時間を見て部屋に行ってくださいね。」

夕食は六時から七時、寮の食堂を使ってください

ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、

大浴場もあります、学年ごとにつかえるじかんが

違いますけど、ああ！でも織斑くんたちは今のところは

使えませんが！

だろうな

「え、何ですか」

キヤーこの子変態よ、誰か警察を呼んでー

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？織斑弟も余計なこ

とを考えるな」

あ、またばれた

「いつ、一夏くんつ、女子とお風呂に入りたいんですか!?だ、ダメですよ!」

「い、いや、入りたくないです」

キヤーここに青いツナギを着た良い男がー

一夏が青いツナギを着た姿が、やべえ似合う

「ええっ!? 女の子に興味が無いんですか？」

それはそれで問題のような」

周りがざわつき始める

「一夏くん男にしか興味が無いの？」

「それはそれで………いい！」

「中学校時代の交遊関係を洗って！今すぐ!!」

やめろー！変な噂をたてるな！俺までまきぞいをくらうだろ！

「えっと、私たちはこれから会議があるのでそれじゃあ」

「わかりました、よしっそれじゃあ神姫！」

一緒にイこうぜ！（意味深）

だめだ！さっきのことで一夏に対する疑惑が出て来て

なんか意味深に聞こえる。あ、そうだ

ちよつと行きたいところがあるんだ

「ごめん一夏、俺ちよつと織斑先生に話があるから先に帰っててくれ」

「うーん、わかった、早く戻ってこいよ」

「わかってるってー」

そうやって俺は千冬姉さんの元に急ぐ

「織斑せんせい」

「なんだ、織斑弟」

「今からって、この学園の整備室って行けますか？」

「まあ、構わんが。何をするんだ？」

「いえ、設備の確認と、俺のISのちよつとした点検

です」

「なるほど、それなら許そう、整備室の場所は

生徒手帳に書いてある。それじゃあな」

「有難うございます」

よーしレッツゴー

「へえーここが整備室かあー」

思ったより設備が充実している

そのなかで一人作業をしている子がいた

ん？あれは一年生だな

少し話しかけてみよう

「ねえ、君、それって君のIS？」

何となく話しかけてみるとこちらに振り向いてくれた

「そう、だから何？」

「いや、かつこいいいなあって思っ、ああ、自己紹介が
まだだったね俺は「織斑神姫でしょ」

「あれ？知ってたの？」

「うん、有名だから」

それもそうか

「なら神姫で良いよ、君は？」

「更識さらしき 簪かんざしで良い」

「なら兄共々よろしくね、簪さん」

「……………神姫くんのお兄さんにはよろしくできないかも

」

あいつ、何かやらかしたのか？

「何で？」

「あの人のせいで私の専用機の開発がストップしたから」

簪さんの言っていたことはこうだ

俺達織斑兄弟がISを使えることによつて

どちらか一人に専用機が与えられることになつたらしい

それで、その専用機をどこで作るかという問題になり

結果簪さんのISを開発していた倉持技研というところに

一夏の専用機が開発されることになった

その現実

簪さんの専用機開発は凍結され、その作りかけの

機体を簪さんが引き取ったというわけだ

うわー一夏さいてー倉持技研さいてー

「でもここまで完成させたんだろ？」

「うん、お姉ちゃんや、友達に手伝ってもらったから」

みんなすごいんだなあ

「あと何が完成してないの？」

「あとはマルチロックオンシステムなんだけど」

「どういうものなの？少し見してもらっていい？」

「うん、いいよ」

俺はそのなんたらシステムってやつを見してもらった

フムフムなるほど、これなら

「ねえ簪さん、このシステム、俺が完成させてもいいかな？」

「え？出来るの？」

「うん、出来るよ。」

「それなら………任せる」

「ありがとう！ちよつと待っててね」

そう言った後俺はキーボードに向き合う

ここはこうして、これはこうなって

よし！できた、あとは簪さんには悪いけど少し

機体を見させてもらおう

うーんこのスラスターの出力はもう少し上がるな

あとはここをこうしてよしっ完成だ！

「できたよ、簪さん」

「え、もうできたの？」

「うん、あと簪には悪いと思ったけど、

少し機体をいじらせてもらったよ」

「どんな、ふうに？」

「えーと、スラスターの出力を少し上げて

荷電粒子砲の威力も少し上げさせてもらったよ

「ごめんね、勝手なことしちゃって」

「ううん、大丈夫、むしろありがとう」

「とりあえずこの機体は完成みただけど

稼働は明日のほうが良いよ？今日はもう遅いし」

「わかった明日にする」

「俺はもう今から寮にいくけどどうする？」

「一緒にいくなら送ってくよ？」

「いや、いい。私はもう少し機体を調整するから」

ちなみに簪さんの専用機、打鉄式式と言う

「わかった、あ、それとーつ聞いていいかい？」

「なに？」

「お姉ちゃんは好きかい？」

「……………うん好きだよ」

「ならその姉、大切にしろよ」

家族はいつ居なくなるかわからない、俺のように

だから大切にしてほしいしな

「わかった……………ねえ！神姫くん！」

「ん？なんだよ？」

「また、会えるよね？」

「同じ学校なんだから会えるに決まってるだろ？」

「：そうだね」

「じゃ、バイバイ簪さん」

「バ、バイバイ」

俺は整備室を後にする

あ！俺の機体の調整してねえ！

（おかしいよ、神姫くん）

なんだよ神、結構久々だからって張り切るなよ

（いやいや久々って言わないでよ！それより神姫くん

少しおかしいんだ）

なにがだ？

（実は原作ではあの簪さんって子はお姉さんと

すごく仲が悪いんだ）

それで、どうなるんだ？

(それを一夏くんが仲直りさせて、簪さんは一夏くんに惚れるんだ)

……………あいつ消しとばねえかな

(そのあと簪さんの姉も一夏くんに惚れるよ)

なんなんだよあいつ！ほんとに！リア充滅びろ

フツメンの敵だ！

(まあまあ、そんなわけで今の段階では姉妹の仲は

悪いはずなんだ)

それが今ではとても仲がいいと

(うん、少しずつ原作が崩壊してきてるね)

まあ俺イレギュラーつて言う転生者がいるからじゃないのか？

(そうだと思うよ)

でもいいんじゃないか？悪い方向よりはいい方向に

崩壊してるしな

(まあ、今のところはね。でもその内悪い方向に

行きそうで怖いね)

それフラグだぞ

(うん知ってる♪)

確信犯だろコイツ

(じゃあ僕が伝えたかったことは伝えたから)

ふーんわかったじゃまた念話してこいよー

(わかったよ、じゃあ切るね。僕も仕事をしなきゃいけないんだ)

そう言った念話を切った

つーかあいつ仕事するんだな

そろそろ寮だな。でも、その前に

スツ

俺は制服の袖からナイフを一本取り出す

IS学園の制服は改造自由なので

俺は制服を改造しまくった

服のあちこちに武器がしまつてある

俺はナイフを植えられている木に投擲した

「さっさと出てきたらどうです?」

木の裏から人が一人出てくる

「いつから気づいていたの?」

「ふええこの人殺気がむんむんだよお

「整備室にいるときからずっとですよ」

「なーんだ最初からばれてたのね、気配は完璧に消してたんだけどなあ」

「人に完璧なんてありませんよ」

「それもそうね」

「で？俺を尾行してなにがしたいんです？」

「単刀直入に言うわ、あなた何者？」

「何者、とは？」

「私の尾行に気付き、私たちが完成させるのに

一ヶ月はかかると思っていたマルチロックオンシステム

を一人でしかも数十分の内に完成させるなんて

普通じゃない。もしこの学園に危害を加えるようだったら、生徒会長として見過ごす

わけにはいけないしね」

この人生徒会長だったんだ

「別にこの学園に危害を加えることはないですよ、

それに俺は俺です今までも織斑神姫ですし、これからも織斑神姫として生きていく。

「これが答えですよ」

とりあえずカッコいい感じに適当に言ってみた

「…………霧雨神姫」

あれ？この人俺の昔の名前しってるの？

「その名前がどうかしましたか？」

「あなたの本名でしょ？」

さすが更識家、対暗部用暗部なだけあって

情報収集力はすごいみたいだ

「だったら、何です？」

「あなたは既に10年前に死んだことになっているわ、

しかも住所不明で死因が謎の事故死、不可解なことが

ありすぎるわ。」

さすがにそんな細かいところまでは調べられなかったか

「仮に、俺が霧雨神姫だったなら、あなたはどうするんです？」

「別にどうもしないわ、生徒会長は生徒の長。

だから生徒一人一人のことは知っておきたいの、

わかる？」

まあ、わからんでもないな

「そうですか、でももう終わったことです、

俺は過去を振り返るような人間じゃない。

ついでに言うとなを向いて生きるんだ！そんなカツコいい人でもない、俺はただ単に今を生きるだけですよ」

これは俺の本心だ、俺は今が楽しければそれでいい
そうやっていつも生きてきたからな

「そう、わかったわ。でも頼るときは頼りなさい！

なんてたって私は「生徒の長、生徒会長なんだから！

でしょ？」

「あらら、言われちゃったわね」

「以心伝心で良いじゃないですか」

「ふふっそれもそうね、それじゃあ私は

生徒会室に戻って仕事するわ

また話しましょう？ 貴方とは話が合いそう」

おおっこの人仕事するんだな、なんかこの人からは
神と同じような感じがしたんだけどな

「そうですね、出来れば今度はどこかの部屋で

ゆっくり。」

「わかったわ、ああ、自己紹介がまだだったわね、

私の名前は「更識さらしき 楯無たてなし」

ですよ」

「あら、またとられちゃった、私のこと知ってたのね」

「ええ、まあ更識ですからね」

「更識家のこと知ってるんだ」

「少しぐらいは、あ、俺の名前は知っているとは

思います」が「織斑神姫、でしょ？」

「今度は俺がとられましたか」

「ふっふーん仕返し成功」

なんかあの人の手に持つてる扇子にバンザイとか書いてある、良いな、あれほしいんだけど、今度作ろつかない

「じゃあ俺は帰ります、これからはお世話になることも

あると思うので兄共々よろしくお願いします」

「じゃあね、あとこっちも妹共々よろしくね。」

あと私のことは楯無って呼び捨てで構わないわよ」

「いえいえ、俺は一夏みたいにコミュ力高くないんで
楯無さんで勘弁してください」

「ふふっ、わかったわそれじゃあね」

そう言ってお互い別れる、ナイフは回収してあるからね！
うん、今日はいいい日だった。

友達が出来たな

箒さんに簪さんに楯無さん

三人の友達が出来たぜ！

織斑神姫！夢は友達100人作ることです！

………なんか寂しいな

俺は寮に帰った

あれ？ここって一夏の部屋だよなあ

何故か一夏の部屋のドアが穴だらけだった

しかたない直しておこう

俺は周りに人がいないことを確かめ

時を戻す魔法を使った

「リバーース！」

よしっ直ったな

俺の部屋にいくか

俺の部屋の番号は1084号だ

部屋につくその瞬間俺はベットにダイヴした

すげえふかふか3秒で寝れる

案の定俺は寝てしまった

よくじつだよ！

「ふああああ」

俺起床

それにしてもよく寝たな

今何時だろう？

ただいまの時間10時20分

……

……

俺終了の報告

え、やばい！寝すぎた！

今教室にいけば千冬姉さんからの

ギカンティック〇ーティアが

俺の頭に炸裂する

一体何故俺は寝坊したのか？

そ、そうだベツトが悪いんだ！ふかふか過ぎるのが悪いんだ！そう言えば千冬姉さんに怒られずに……：

だめだギカンティック〇ーティアどころか

ブラスター〇テオくらうわ

なんか今千冬姉さんが「気が、気が高まるう」

とかいつてそうだもん

ブ〇リーがスゲー頭に出てくるんだけど！

「遅刻したか、まあ許してやる。と、思っているのか？」

つて言ってくるよやべえよ

何があつても死亡フラグだよ！

よしっ逆に考えるんだもう既に遅刻決定なんだ

ゆつくり準備してもいいじゃないか

「なるほど、そう思ってたゆつくり準備してて

貴様は遅刻してきたのか」

はい、こちら神姫です、ただいま断頭台の上に立っている気分です

あのあとゆつくり準備して教室にいったら

もう4時間目の授業でした☆

そして今僕はお説教されています

既に出席簿のアタックはくりました

「まあいい、ただし今度遅刻したら、わかっているな？」

コクコクコクッ

「そうか、ならさっさと席につけ」

こええええええええ

家の姉さんが最強過ぎる件について

やべえよ確かに強さ的には俺が一番つよいけどさあ

怖さ的にはあの人カーストの頂点だよ！

貞子も井戸から出てこねえよ！

キーンコーンカーンコーン

あれ？俺今日授業まだ受けてないんだけど

昼食！

ふう、ただいま俺は屋上にいます

何で食堂じゃないかって？あんな女子しかいない

ところに行けるか！

午前中に何があったのかを一夏に聞いたところ

一夏に専用機が渡されることを教えてもらったらしい

うん、知ってた

あとなんか箒さんが篠ノ之博士の妹ってことがばれて

箒が怒ったとか

そんな位だろう

さてと、もうすぐ終わるな教室にゴー

放課後！

イヤー終わった終わったあー

そう言えば今日簪さんが専用機の稼働テストするんだっけ
ついでに一夏が箒さんと修行するらしい

一夏がこてんぱんにされる姿が目には浮かぶ

よし簪さんの専用機を見にアリーナに行くか
そう思いアリーナに向かう

着いたなあ結構広いぞ

あ、簪さんはっけーん飛んでる飛んでる
ん？やべえ！足のスラスターが爆発しやがった！

どんどん落ちて行ってる

助けねえと！さてと久々のIS展開だぜ

「行こうか、グレイザー」

俺はIS、グレイザーを纏った

装甲は手と足しかついておらず

体を守る装甲は何一つない機体だ

俺は瞬時加速で簪さんに近づきそして落ちてきたのを
受け止める

回収完了☆

俺は一言

「よう、また会ったな」

簪さんをおろしなせこうなったかの理由を聞く

「何で落ちてたんだ？」

「足のスラストターが両足とも爆発して、

期待制御システムも不具合が起きて、それでどうすればいいかわからなくて、落ちた」

「なるほど、まあいいや、簪さんも無事だったんだし」

「神姫くん、ありがとう、それとさんはいららない」

「そうか？なら俺もくんは要らないよ」

「うんわかった、神姫」

「わかればよろしい、で、これからどうするんだ？」

「整備室に戻って壊れたところを修理する」

「そっか、俺はこれから用事があるから手伝えないけど

、何かあったらいつてくれよ？簪」

「うん」

「じゃあなー」

さてと、一夏のところに行くか

剣道場

俺が剣道場で見た光景は

なにやら怒っている箒さん

正座している一夏

………

何があつた？

話を聞くにどうやら一夏は弱すぎるらしい

ドンマイ一夏、これはおれも否定できない

とりあえず喋りかける

「おいおい、一夏なんだよそのザマは」

「あ、神姫！」

「ああ、なんだ神姫か」

「箒さん、一夏が弱い点については許してやってくれ、

最近までずっとバイトしてたからな一夏は。

剣道なんて出来ねえよ」

「おお！神姫！今日はお前が神に見えるぜ！」

「箒さん、やつぱりコイツもつとこてんぱんにしてやってください」

「承知した、早く立て！一夏！続きをやるぞ！」

「は、はい！」

うむうむ、これが尻に敷かれるってやつか

「そう言えば神姫、お前は練習しなくても良いのか？」

「俺は俺でやってるよ」

毎日の日課はやっている

「そうか、なら俺も頑張らないとな」

やる気が出てきました一夏選手！

さあどう箒選手に立ち向かうつもりでしょう？

ああーつと一夏選手！正面突破だー！

対する箒選手、冷静に対処してますねえ

そんなことがずっと続きました

一週間後、

「なあ、箒」

「なんだ、一夏」

さあ、やって参りましたオルコットさんとの決闘の

日でございます！

「ISのこと教えてくれる話しはどうなったんだ？」

「……………」フイツ

「目をそらすな」

やめろ！一夏お前には一週間前のホモ疑惑がまだ

かかっているんだ！（主に俺から）

そんなときにそんな言い方をしたら

「やらないか」にしか聞こえなくなる！

「仕方ないだろう！お前のISもなかったのだから」

「それはそうだけどって違う！知識とか基本的なこととか、あつただろ！」

「……………」フイツ

「目をそらすなっ」

やめろー！言うんじゃない！つい反応しちゃうって尻を隠しちゃうんだこっちは！

「一夏くん一夏くん一夏くん！」

あ、山田先生が走ってきた、転びそうだな

「山田先生落ち着いてください、はい、深呼吸」

「は、はいっ、すーはー、すーはー」

「はいっ、こそでとめて」

おい、なにやってんだ一夏

「うっ」

おい、山田先生の顔が赤くなってきたぞ

「ぶはあ！ま、まだですか？」

うわあ山田先生いい人

スパアンツ

「目上の者には敬意を払え馬鹿者」

「ち、千冬姉」

スパアンツ

「織斑先生だ、学習しろ、さもなれば死ね」

うはあ、痛烈なお言葉

「それでですねっ、来ました！一夏くんの専用機が！」

「織斑兄、すぐに用意しろアリーナの使用時間は限られている、ぶつつけ本番でものにし
ろ」

さすが鬼教官、言ってることが無茶苦茶だ

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えて見せろ
、一夏」

「え、え、なん……………」

困惑する一夏

「「早くー」」

おう、怖い怖い

搬入口が開く

段々と一夏の専用機が姿を表す

へえーこれが、一夏のISかあ

「これが……………」

「はい！一夏くんの専用IS、白式（はくしき）です！」

白式って言うのか確かに真っ白だしな

よしっもうすぐ一夏の戦いが始まる、

俺は控え室にでも戻りますか

「織斑先生、俺は控え室に戻っています、

今一夏の試合の戦闘を見たらフェアじゃないですし

「わかった、試合が終わり次第呼ぶからな」

「はい」

と言つて俺は控え室に戻る

一夏の試合中俺超暇なんだけど！

暇だなーやることないなーって思ったとき

「し、神姫」

突然声をかけられた

声が出た方を見ると簪がそこにたっていた

「どうしたんだよ簪？」

「いや、特に理由はなかったんだけど

来ちゃ、ダメだったかな？」

「いや、そんなことはないぞ。

むしろ超暇だったからな助かったよ」

そう言うと簪は笑顔になる

何だろ、無駄に可愛い

「よかった、試合、大丈夫？」

「ああ、大丈夫、だと思うぞ」

「あらーでもこの一週間何も練習してなかったじゃない」

そう言つて現れたのは簪の姉楯無さんだった

「何ですか？楯無、冷やかしに来たのなら戻つてくださいよ」

実はこの一週間俺は特に特別なことはなにもしていません

まあ日課はやっているがそれがいいは

ずっと楯無さんや簪としゃべったりしていた。

生徒会室にもいったりしたがそこでは

楯無さんがサボつてたためた分を俺も手伝つて

消化したりしていた。その時に、生徒会のメンバーで

生徒会一のしつかりもの

同じクラスにいる布のほとけ ほんねの本音の

お姉さん布のほとけ うっほ虚さんと

仲良くなつたちなみに本音とも仲良くなり

俺はのほほんさんと呼んでいる

そして俺はしんしんと呼ばれている

以上今日までの一週間の活動の説明でした

「別に、冷やかしになんて来てないわよ」

「ならなんできたんですか？ 楯無さん？」

「え、なんか簪ちゃんとは反応がちがうんですけどー」

「当然でしょう？ この一週間で俺に何回厄介事を

運んできたと思ってるんですか？」

「そ、それは、そうだけど」

「わかってるのなら反省してください

ア—ユー—オウケイ？」

「オウケイ」

「……………クスッ」

「あー！ 今簪ちゃん笑ったでしょー！」

「笑ってないよ、お姉ちゃん」

「絶対笑ったでしょー」

うんうん、なんとも微笑ましい光景だろう

家族はこうでなくてはいけない

『織斑神姫くん、至急ピットに来て下さい』

お、終ったみたいだな

「よしっじゃあ簪、楯無さん、行ってきます」

「頑張つてね」

「行つてきなさい神姫君！おねーさん応援してるわよ」

「ありがとうございます、では」

俺はピットに向かう

結論を言おう

一夏は負けた

一夏がギリギリのところフアーラストシフトで一次移行をして、なんかめっちゃくちや恥ずかしい

俺が言ったら次の日絶対学校に来れなくなるような言葉を発言しあともう少しのと

ころで一夏のエネルギー

切れで負けたという

まじでなにやってんの一夏

ISにはシールドエネルギーというものがあり

それがあつた限りISの絶対防衛が発動し搭乗者の命をまもる

一夏の機体白式はなんとブレオン

ブレードオンリーな機体だった

他に武器をいれようとしてもISの拡張領域パススロットに空きがなく現在は白式の唯一武装

雪片式型と、白式のワンオフアビリティ

零落白夜が入っていることで埋まってしまっている

零落白夜というのはバリア無効化攻撃で

あらゆるエネルギーを切ることが出来る

その代わり自身のシールドエネルギーを大幅に

削るので使い時を間違うとすぐにエネルギー切れになる

今回一夏が負けたのはそれが理由だ

一夏ザマア

「神姫、俺は負けたけどお前は頑張れよな」

「わかっているよ一夏」

「それでは神姫君、打鉄を使うか、ラファールか

選んでください」

なんだ、山田先生は俺が専用機を持つてるってこと
知らないのか千冬姉さんが伝えるのを

忘れたな、職務怠慢、一生独身、強情教師

スパアンツ

「今、失礼なことを考えていただろう？」

「すみませんでした」

なんでばれるんだろう

「山田君、大丈夫だ織斑弟は既に専用機を持っている」

「ええー！神姫君専用機を持っているんですか!？」

「はい、では行つてきます」

「ああ、行つてこい」

「さてと、今回は初陣だ、行こうかバイパー」

俺はISを纏う

紫色の薄い装甲に走る黒い線、顔と胸以外は

装甲に覆われており胸には黒い宝玉のようなものが

ついている

能力はまた後程

カタパルトに乗って一言

「織斑神姫！バイパー！いつきまーす」

その言葉を最後に俺はピットから飛び出す

「よう、オルコットさん」

「ああ、神姫さん、まずはあなたにあやまらなければいけません」

え、なんで？

「これまでのあなたへのご無礼申しわけありませんでしたわ」

「え、なに？変なキノコでも食ったの？」

「いいえ、違います、わたくしは一夏さんと

戦って目が覚めましたわ。なのであなたとの試合、

全力でいかせてもらいますわ」

この少し赤い顔まさかっ！

「オルコットさん、一夏に惚れたね？」

「な、何を言うんでございますの／＼／＼／」

「惚れたね？」

「はい、そのとうりでございますわ」

いきなりプライベートチャンネルで話しかけてくるオルコットさん

くそうっ！夏の魔の手が予想より進行が早い！

なんだよあいつ！まじ滅びろよ！

『試合開始！』

「最初から全力でいかせてもらいますわ!!

行きなさいブルーティアーズ！」

オルコットさんの機体から飛び出してきたのは

4つのビット

さあ！弾幕ごっこの始まりだあ！

右左上後ろ前前と

どんどんビームの嵐を避けていくおれ

「くっ、なんで当たりませんの？」

「それは、お前がまだ弱いからだ！」

そうやって俺は武器を取り出そうとする

が、

「……………あれ？」

「どうしたんですの神姫さん？」

「武器が入ってない」

「「「ええー！」「」」」

会場中がハモった

「武器がないって、正気ですのあなた？」

「いや、それがさあ、この機体、一夏と同じで

一次移行してないんだ」

「あなたもですか？ どうしますか？」

「このまま続けますの？ それとも一次移行が終わってからにしますの？」

「いや、このままでいい、この機体は武器が無くても

能力はあるからな」

「ならば続けます！ 行きなさい！ ブルーティーズ！

ふええビツトが飛んできたよおお

だが見せてやるこの機体の真骨頂を！

「バイパーコアネットワークに接続！

アクセス開始！」

「な、何をするきですか？」

「見てからのお楽しみさ」

「アクセス完了、コアと同調開始、機体名白式！」

あ、ピットにいる一夏が反応してる

「同調完了、これで準備はできた、

さあ、続きと行こうかオルコットさん」

「な、何が変わりましたの？」

俺はある武器を呼び出す

「来いっ！雪片式型！」

次の瞬間俺の手に握られていたのは本来白式の唯一武装

雪片式型だった

「その武器は、一夏さんの機体の武器のほすですわ！」

なぜあなたが持っているのですの!？」

「まあいいや、種明かしだ。この機体の能力は

コアネットワークに接続しISのコアと融合させることだ

」。

「どういうことですか？」

「ISにはコアがあるだろう？そのコア一つ一つにこの機体は融合できる、つまりその機体の武装やなんかを使うことができるというわけさ」

「な、なんですかそのその機体、反則ですわ！」

「ふふ何を言っている戦いとは勝てばよかるうなのだ！」

「さて、試合再開と行こうじゃないか」

そう言つて俺は動き出す

まずはビットを潰す

俺は雪片を振るい真空斬を飛ばす

オルコットさんは反応できずにビットに当たる

「よしっまず一つ！」

「今何をしましたの？」

「何つて真空斬を飛ばしたただけだけど？」

「そんなことができるんですの？」

「まあね、それより、よそ見禁止だぜ」

もう一度雪片を振るい真空斬を飛ばす

またビットに当たる

「二つ目え！」

そのまま瞬時加速を行い三つ目のビットを破壊する

「これであと一つだ！」

「うそ、こんな短時間で、ビットが」

「俺はあと一つのビットを追いかける

「くっ、もうやらせませんわ！」

オルコットさんもビットを逃がしながらビットと

持っているライフル

スターライトMKⅢを使って打ってくる

だけど無駄むだあ！こっちはチート人間なんだよお！

そんなレーザー遅いわあ！！

俺に当てたきや光の三倍の速さのビームでも打ってこいや！

ビットをずっと追いかけていると

あ、エネルギーが切れた、ビットがしたに落ちていく

「あとはオルコットさんだけだな」

「これならば来てみなさい！」

へえ、そんなに来てほしいのか、ならばお望み通り

行つてやろうじゃないの。

俺は瞬時加速を使いオルコットさんまであと十メートル

というところまで近づく

「かかりましたわね！」

ん？なんか言ってるぞ

オルコットさんがそう言った瞬間腰辺りの装甲が外れる

やべえ！あれミサイルじゃん？

「ビツトは六機あつてよ！」

ミサイルが飛んでくる、ただどね、無駄なんだよお！！

「零落白夜、発動」

雪片の刀身が割れてそこからエネルギー刀が

出てくる

それでミサイルを一閃

ミサイルは二つとも真つ二つになって落ちて行く

「な、なぜあなたが零落白夜を!？」

「機体と同調するってことは、コアと融合するってことだ、それならワンオフが使えても

おかしくないだろ？」

「ほんとに、とことん反則ですわね、あなたのISは！

インターセプター！」

オルコットさんも近接武器を取り出す

さて、久々にやるか、剣術の型を。

「秋羅一刀流参の型、駿斬ー」

音速より速いスピードでオルコツトさんを切る

俺が過ぎたあとオルコツトはもうボロボロだった機体には無数の切り傷があり、シールドエネルギーはとつづくに尽きていた

『勝者、織斑神姫』

まあ、こんなもんかな

肩慣らしにはなつたな。

よし、次は一夏の対戦か

あ！やべっ！まだ一次移行してねえ！

まあ、なんとかなるだろう

そんなことを思いながらおれはピットに戻った

第10話

神姫、ピットに帰還

「ただいまー、勝ったよー」

「おうー、おめでとう神姫！それにしても

すげえな、お前のIS！」

一夏が叫ぶ

「ああ、雪片は白式に返しておいたから、

もう武装欄にあるはずだよ」

「ん、ほんとだ！今度は俺たちの試合だな」

「そうだね、次の試合で俺は一次移行させるつもりだから、それまで持つてくれよ？」

夏

「まあ、頑張るぜ」

「次の試合は10分後だ織斑弟、お前のISのエネルギーでも回復しておけ」

「俺のISのこと聞かないんですね。」

「まあ、お前は私の弟だからな、悪用しないと

信用している。だが、今回の試合でお前のISの能力は

おそらく世界に広まるだろう、そうなったら

世界が放っておかないぞ」

「え、何でだ？千冬姉？」

「織斑先生だ、何でか？と聞いたな、お前は

アホじゃないのか？織斑弟のISは、

簡単に言えば全てのISと繋がることのできる能力だ。

そこはわかるな？」

「ああ、そのくらいはなんとか」

「では、バイパーはISと繋がることで、

何が出来るんだ？」

「えっと、確か、武装の使用とワンオフアビリティーの

使用だな」

フフフまだ甘いな

「それと、追加だ、確かに武装の使用権を得る事も出来るけど、それは、ほんの一部でしかない」

「なに？その能力がだった一部だと？」

「ならば本当の能力は……っ！まさかつ！」

「ああ、そのまさかだ、バイパーの能力は

ISの武装の使用権を得ることじゃない、

ISそのものの使用権を得ることだ」

「ん？そのの何がすごいんだ？俺にもわかるように

教えてくれ、神姫」

「うーん、そうだなあ、なら、さっきの

試合で俺は雪片を使っただろ？」

「そうだな」

「その時、俺は白式そのものを使うことも出来たんだ」

「ええ！でも白式は俺の専用機だぞ？」

「そんなことは関係ない、そうだな、ビットを

操る感覚と同じって言えばわかるか？一夏」

「そういうことか、なら白式が遠隔操作出来たのか？」

「まあな、でもそれはさすがに、セコいなーって

思ったからしてないけど」

「でも、そのの何がいけないんだ？」

単なる機体の能力じゃないか」

と、一夏が言うと織斑先生は頭を抱える

「織斑兄、なぜわからない？ いいか？ 全ての I S を

操ると言うことは、全ての I S の情報を得ることが

できるということだ」

「それは、すごいのか？」

いつから俺の兄はここまでバカになったのか。

千冬姉さんに叩かれ過ぎたか？

「一夏、I S の技術はどの国も公開してないだろう？」

「そうなのか？」

「うん、でも俺の I S は全ての I S に繋がること出来るだろう？」

「おお、知ってるぞ」

「だから俺は全ての I S の技術を知ることが出来るんだよ」

「へえーすごいんだなあ」

コイツうまだわかってねえ！

「はあ織斑兄、例えば貴様は、どんな勉強もすぐにわかるようになる薬があれば、欲しいと思うか？」

「なにいつてんだよ千冬姉、欲しいに決まってるだろ」

欲望に忠実な一夏である

「それと同じだ、バイパーはその薬と同じような

ものだ、全ての I S の情報が瞬時にわかる。

そんな I S、どこの国も放っておくわけがないだろう。」

「そういうことか、やっとなわかつたぜ！」

「だが織斑弟、その I S を持つリスクは貴様なら

わかっているだろう」

「はい、わかっていますよ」

俺はこの先いろんな国から勧誘を受けるだろう

当然だ、俺さえ行けば全ての I S を知ることが出来るんだからな、最悪誘拐、いや、俺を殺して I S を奪う

なんて事もあるだろうな

「なら、いい、こちら側も出来るだけ神姫を守る

これは I S 学園の教師として、そして一人の姉としてだ」

「ありがとう、千冬姉さん」

「俺も、なんかわかんないけど神姫を守るぜ！」

コイツまだわかってなかったのかよ！

「う、うん、あ、ありがとう」

「よし、では織斑弟、反対側のピットに行つてこい」

「ウィーツス」

神姫移動中

「神姫君」

「神姫」

ピットに先客がいた

「なんだよ簪？ 楯無さんも。」

「単なる応援よ。あと、少しだけあなたのＩＳに

ついてね。」

「俺のＩＳの情報が欲しいなら織斑先生にでも

聞けばいいですよ」

「それもあるけど、あなた、狙われるわよ」

「わかってますよ、でも、そんなこと気にしてたら

俺は精神崩壊しますよ」

「そう、でも、気を付けてね。」

「ええ、わかっていきます、俺を狙いに来たら、

さあ？どうしましょうかね？」

「そういえば、神姫、この前私を助けてくれたときと

機体が違った」

「俺はISを複数持つてるからな」

「え、全部神姫が作ったの？」

「いいや、全部貰ったんだ、知り合いから」

うそでーす、全部自分で作りましたー

「その人は？」

「どこかに行っちゃいましたよ、3年前に」

うへー超適当だー

「そう、………まあ、試合、頑張つてね！」

「そのつもりですけど、またどこかの機体から

武器を持つてこないとなあ」

「だったら、私のを、使つて」

「え？良いのか？簪」

「うん、良いよ」

「ありがとな、簪」

『ただいまより、織斑一夏、織斑神姫の試合を始めてます。両選手はアリーナに出てきてく
ださい』

「それじゃあ、行ってきますよ」

「頑張つてね！」

「仲の良いことで」

「行こうか、バイパーー！」

俺はバイパーを纏う

さーでどういたぶつてやろうか

「お、来たな神姫」

「来てやったさ」

「俺はお前が一次移行してなくても全力で

いくからな！」

「わかったわかった」

『試合、開始！』

その瞬間一夏が突撃してくる

零落白夜を使いながら。あいつ学習してねえな

零落白夜なんて、ずっと使いつばじゃなくてもいいのに

そんなんだからエネルギーがすぐに無くなるんだよ

「やあああ！」

一夏は雪片を振りかぶり右斜めから斬りかかってくる

俺は少しだけ動いてそれを避け、白式の足を蹴り

スラストターを一つ壊す

「うわあっ」

バランスを崩した一夏はそのまま下に落ちる

その隙に俺はボイスコマンドを入力する

「バイパーコアネットワークに接続開始」

「やべえ！」

やっぱりあいつ、俺のISの能力はボイスコマンドを

入力しないといけないってわかっていたか

多分千冬姉さんが教えたんだろなあ

ひどいよー弟最真だよーあ、俺も弟だったわ

「やらせねえ！神姫！」

おー速い速いさすが剣道経験者動きに筋が通ってる
でも、一つの動作が大きすぎて

避けやすいし隙だらけだ

「接続完了、機体にアクセス開始、機体名、打鉄式式！」

ピカーン

バイパーの胸のパーツが、光る

「よし、同調完了、残念だったな、一夏」

「くそっ倒しきれなかったか」

倒しきれないどころかノーダメージなんですけど

「反撃開始だぜ、一夏」

俺は打鉄式式の武装、薙刀の夢現を出す

そして、

「これでもくらいな！」

そう言つて俺は武装山嵐を取り出す

山嵐は計80発にもおよぶミサイルだ

マルチロツクオンシステムもこれのために搭載してある

「え、ちよつとまで！落ち着け！神姫い！」

「フハハハハハハハ！いけえ！山嵐！」

俺は一斉にミサイルを打ち出す、一つ残らず

ズドドドーン

おお、逃げてる逃げてる、でもいくつか被弾してるみたいだな、装甲が所々ボロボロだよ

「これでとどめだ！一夏！」

俺は夢現を一夏に向かって投げる

「うおつ、まずい！」

一夏は雪片で夢現を弾いた

山嵐が撃ち終わり全弾爆発した後まだ一夏は生きていた

「チツ生きてたのか、ゴキ○リかよ」

「ひでえな！その言い方！」

まあいいさ、こつちもやつと終った

「ありがとう、一夏、お前がずっと不様に逃げ回って

くれたお陰で、こつちも準備が整ったよ」

「不様は余計だぞ、それより準備って？」

「わからないのか？まあ見てろって」

3

2

1

0

『フォーマット終了』

と、メッセージが出る。

次の瞬間バイパーは光に包まれた

「これは、俺の時と同じ、っていうことは一次移行か！」

「そのとーり！」

光が消え機体が現れる

ぱつと見なにも変わっていない、バックパック以外は

いまバイパーの背中には大きな武器のようなものが

ついている

「なんだよその背中のは？」

「ほほう興味津々ですなー」

「バイパーの武器だよ」

「なるほどーじゃあいくぜー！」

わー一夏が突撃してくるよー怖いよー

俺の武装見してやる！

「タクティカルアームズ！」

アス○レイですねわかります

「ソードフォーム！」

バックパックは変形し剣へとかわる

「一夏あ、ブレオン同士仲良くしようや」

俺は剣を振るう

「うわあつ、ぐう重たいな」

お、受け止めたか流石だな、ならもう少し力を込めるか

俺は次々と剣を振っていく

右から左へ上から下に

どんどん一夏を追い詰めていく

「ぐわあつ、神姫つてこんなに強かったのか？」

「まあな、今のお前よりは強いさ」

「あはははは、これは認めなきやな、神姫は俺より

強い、しかも圧倒的にだ。だけど俺もこのまま負けるのは性に合わないからな、

少しは抵抗させてもらうぜ！はあっ！」

そう言って一夏は最後の攻撃を仕掛けてくる

「いいだろう、一夏！俺も少しは本気を出してやるよ」

俺も3割の力を込めて剣を振る

ガキーンッ

お互いの力が拮抗する………事はなく一瞬で一夏は力負けし、下に落下していき地面に叩きつけられる

「いってえ、まだだあー！」

「いや、もう終わりだよ、タクティカルアームズ！」

アローフオーム！」

剣が変形し大きな弓矢の形にかわる

「ゲエツ、お前それブレオンじゃなかったのかよ！」

「勝てばいいんだよ、勝てばあー！」

「じゃあな一夏！俺の勝ちだあ！！」

神姫は矢を放つ

「裏切り者おー！」

一夏、被弾

『試合終了、勝者、織斑神姫』

ふうっ終ったな

俺全勝、俺TUEEEEEEEEEEEEE!

こうしてクラス代表決定戦は終った

一夏、代表になるってよ

「では、一年一組の代表は織斑一夏君に決定です

あ、一繋がりでいい感じてすね！」

先生、悪いけど全然面白くないから

「先生、質問です」

「はい、一夏くん」

「俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になってるんですか？」

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

オルコットさん、朝からうるさい

「なるほど、でも普通に考えて代表は神姫じゃないのか？」

試合に全勝してるし」

うん、圧倒的正論、オルコットさんがギクツみたいな

顔してるし

「一夏、俺は弟として兄には強くなってもらいたいんだ」

「お、おう」

「強くなるには経験が必要だろうか？だから俺は一夏をクラス代表について、織斑先生に言っておいたんだ。

もう少しでクラス対抗戦も有るしね」

「なるほど、わかったぜ！神姫、俺頑張るよ！」

洗脳完了

「そ、それでですわね」

お、さっきまで空気と化していたオルコットさん

が出てきた

「神姫さんの言うとうり一夏さんにはまだ力がありません。

なのでわたくしのように優秀でエレガント、

華麗にしてパーフェクトな人間がISの操縦を教えて差し上げれば、それはもうみる

みるうちに成長をー」

ばん！机を叩く音が響く

それにしてもオルコットさん、なぜそこまで

自分を自慢できるのか？

そこに痺れる憧れるう！ なんちゃって

「あいにくだが、一夏の教官は私で足りている。

私が、直接頼まれたからな」

おやおやあ、これは修羅場のよ・か・ん

「あら、あなたはISランクCの篠ノ之さん。Aのわたくしに何かご用かしら？」

「ランクは関係ない！頼まれたのは私だしい、一夏が

どうしても懇願するからだ」

へえ、一夏練習であんなにボコボコにされてたのに

また箒さんに頼んだのか

一夏ってMなの？

「座れ、馬鹿者」

バシン

織斑先生降臨、なんて威圧感だ、これが黄金聖闘士の

力！敵わない！

バシン

「下らないことを考えるな馬鹿者」

なぜわかるのだろう？あ、一夏も叩かれてやがる

またしようもないギャグでも考えてたんだろう

「お前たちのランクなどゴミ同然だ、私からしたら

どれも平等にひよっこだ。

まだ殻も破れていない段階で優劣をつけようとするな」

この教師生徒をゴミって言ったよ。まてよ、

俺たちがゴミならこの学園はゴミ箱か。

この例えうまくね？

バシン

「うまくないわ馬鹿者」

いてて、我ながらいいギャグだと思ったのになあ

「いいか、代表候補生でも一から勉強してもらおうと

前にいっただろう。くだらん揉め事は十代の

特権だが、あいにく今は私の管轄時間だ。自重しろ」

自重ってカタカナで書くと韓国人みたいだよな。

ジ・チョウ。なんちやって

バシンッ

「下らないことを考えるなど言ったはずだが？」

「すいませんでした。」

なんでわかるんだらうね

エスパー千冬、なんちやって

スパアンツ

「反省する気はあるのか？」

「あります、ありますとも。……………フフツ」

いかん！千冬姉さんがカバンの中に入っている

姿を想像すると……………だめだ笑いが止まらない

ハ―イ！なんつって

ゴチン！

「反省しろ、い・い・な？」

「わかりました織斑先生」

「わかればいい」

「一年一組の代表は織斑一夏、異存はないな」

「「「はい！」」」

はい！吾朗さん！なんちやって

バシン

「反省しろと言っただろ馬鹿者があ！」

こうして授業が終わっていく

ダンスの角に小指打つと痛いっていうけど実際どこの指打つても痛いと思う

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑兄弟、オルコット、試しに飛んでみせろ」

四月下旬、桜の花びらが舞う頃いまなら「散れ、千本桜」とか言える頃俺達はISの実践授業を受けていた

「早くしろ、熟練したIS操縦者なら展開まで一秒とかからないぞ」

先生、一夏は初心者でーす

俺はISの待機状態である指輪を取り出す

一夏はガントレットだ

ガントレット、チャージオン！なんちやって

あれ？このネタわかる人いるのかな？

「織斑弟、集中しろ」

「は、いー」

俺は一瞬でバイパーを纏う

なんでだろう、みんな見てる。きやー感じちやゲフンゲフン

「さ、流石だな織斑弟、展開までに0.1秒もかからないとは」

そんなに早かったの俺？ いやー照れるなあ

あ、一夏がやつと展開した

一夏身長高いなあ。俺なんてIS展開してみんなと同じ

位だぜ、この世の理不尽を感じるよね、うん

「よし、飛べ」

飛翔せよ！スター○ストドラゴン！なんつって

「いいから早く飛ばんか！」

俺は飛んだ、音速で

地面が軽くへこんだな

俺は400mぐらいでとまった

すごい高い

人がゴミのようだ！ 違うか

一夏のやつふらふらしてるよー

だっせえー

10秒くらいでやつと来た

「はええよ神姫、なんでそんなに上手いんだよ」

「まあ練習したからな」

「俺も練習してるんだけどなあ」

俺に勝とうなんざ一生早いわ！俺に勝ちたいのなら

転生してこい！

「一夏さん、よろしければまた放課後に指導してあげますわ。その時は二人きりで」
「一夏っ！いつまでそんなところにいる！

早く降りてこい！」

あ、箒さんが山田先生のインカムを奪って通信してきた

そんなことしたら！織斑先生に！あ、叩かれた

合掌

「織斑兄弟、オルコット、急降下と完全停止をやってみせろ。目標は地上から十cmだ」

わーお難しいなあ

「了解です、では一夏さん、お先に」

あれ、俺には？俺は軽く泣きそうになった

失敗してしまえ！

くそ、成功しやがった

「じゃあ、一夏、俺もいくよ」

「おう、頑張れよ」

俺は急降下する、音速で

そして止まる、地上一センチってところか

「よくやった織斑弟、だが今度から音速で飛ぶのは止めろ。」

「わかりましたー織斑先生」

「まあいい、織斑兄、さっさとしろ」

一夏が降りてくる、あ、あれは一夏墜落するな

よしっこうなったら

俺は墜落予想地点に向かうそして

「オラアッ」

ちようど落ちてきた一夏を蹴る

「ぐああっ」

飛んでいく一夏

「いてて、神姫！なにすんだよ！」

「あのままで一夏墜落してただろ、地面に穴ぼこが

できてもいいのか一夏は？」

「俺のことより地面かよ！」

「当然だろ？」

「即答かよ！」

「情けないぞ一夏、昨日教えてやっただろう」

ちなみに箒さんの教え方というのは

「ぐっ、ていう感じだ」

「どんっ、てする感覚だ」

「すがーん、という具合だ」

円道守のじいちゃんの秘伝書ぐらいに意味不明だった

「大体だな一夏、お前というやつは昔からー」

「一夏さん！大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だけど」

「それは何よりですわ」

良かったな一夏、お前に心配してくれる人がいて

「……………ISを装備していて怪我をするわけがないだろう」

「あら篠ノ之さん、他人を気遣うのは当然の事。」

それがISを装備していても、ですわ、常識でしょ？」

「お前がどうか。この猫かぶりめ」

「鬼の皮をかぶっていふよりはマシですわ」

「こらこら喧嘩はやめーい一夏ラヴァーズ。目障りだ

「おい、馬鹿ども。邪魔だ、端っこでやっていろ」

「織斑兄、武装を展開しろ、それくらいはできるように

なっただらう」

「は、はあ」

「返事は、はいだ」

「は、はいっ」

「よし、でははじめろ」

一夏が雪片を展開する

「遅い、0.5秒で展開しろ」

「オルコット、武装を展開しろ」

オルコットさんは一瞬でライフルを展開する

しかも射撃可能だよ

「流石だな、代表候補生、ただしそのポーズはやめろ

誰に向かって撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」

「で、さすがこれはわたくりのイメージをまとめるために必要なー」

「直せ、いいな？」

「……………はい」

言葉の重み、発動！

「織斑弟、武装を展開しろ」

えーめんじごくさいなあ。そうだ！

「先生！俺の武装はこのタクティカルアームズしかありません」

「……………それは本当だな？」

「……………は、はい」

「取り消すなら今のうちだぞ」

「すいませんでした、まだ武装はあります」

スパアンツ

「教師に嘘をつくな馬鹿者、いいから早く展開しろ」

俺は一瞬で腰に短剣アーマーシユナイダーを

展開する

「流石だと言っておこう、では射撃武装を展開しろ」

俺はまた一瞬で射撃武装ルプスビームライフルを

展開する

ちなみにバイパーの武装は全てガン〇ムにある

武装だ

「よくやった。次にオルコット、近接武器を展開しろ」

やった！あの千冬姉さんに誉められたよ！

明日は大雨かなあといいながらオルコットさんを見る

「くっ……………」

「まだか？」

「す、すぐですーああ！もう！インターセプター！」

そう言った瞬間、粒子が固まりだし武器になる

「……………何秒かかっている。お前は実戦でも相手に待ってもらおうのか？」

「実戦では近接の間合いには入らせませんわ！」

ですから、問題ありませんわ！」

「ほう、織斑兄弟との対戦で初心者に簡単に懐を

許していたように見えたが？」

「あ、あれは、その」

墓穴を掘ったなあ、オルコットさんドンマイ！

「あなたたちのせいですわよ！」

え、何で？

「あ、あなたたちが、わたくしに飛び込んで来るから……」

だって近接武器しかなかったんだもん！

「せ、責任を取ってもらいますわ！」

いいだろうとってやるさ！一夏がな！

「時間だな。今日の授業はここまでだ。それでは、解散！」

「良かったな一夏、あのときおれが蹴り飛ばしてなかったらお前いまから地面を埋める

ことになってたぞ」

「確かにな、サンキュー神姫」

「良いつてことよ」

全ての授業が終わり、俺は寮へと帰る

部屋の前についたぜ

俺はドアを開ける

「お帰りなさい、ご飯にしますか？お風呂にしますか？」

それともわ・た・し？」

ガチャリ

俺はドアを閉めた

はあ、またか、正直これ三回目である。

この人も懲りないなあこの前千冬姉さん呼んだのになあ
まあいいやそう思いおれはもう一度ドアを開ける

「お帰りなさい、私にしますか？わたしにしますか？」

それともわ・た・し？」

「どいてくださいよ楯無さん」

「いいじゃないの、たまには息抜きも必要よ？」

「あなたといると余計疲れるんですよ」

「あらひどいじゃない、こんなおねーさんと居れるのよ？」

「…………千冬姉さん呼びますよ？」

「すいませんでした反省します」

千冬姉さんは最恐である

「で、なんのために来たんですか？」

「んー暇だから？」

「またサボりですよね？」

「フツフーン、今日はきつちり終わらせて来たのだ！」

「それで楯無さんの顔少しやつれてるんですね」

「あら？わかつちやつた？それよりあなたは行かなくていいの？」

「どこにですか？」

「あれ？聞いてないのね、今日は一年一組で

クラス代表就任パーティーがあるのよ」

え、真面目に知らないぞ、これは、俺は要らない子なのね

「知らなかった、俺ってクラスでボツチだったんだ」

「まあ、気にすることないじゃない、

あなたには私がいるわ！」

「あ、そうですね」

「何で急に冷めちゃうのよ！」

「だって、ねえ？」

「え、なに？おねーさん何かしたの？」

「え？俺になにもしてないって胸を張って言えるんですか？」

「……………言えません」

「ほら、だからですよ」

「うう、これからは厄介事はあまり持つてこないようにします、それと仕事も自分でします」

「だ、そうですよ、良かったですね、虚さん」

「え、」

私は神姫君の後ろを見た、そこには無表情の虚ちゃんの

姿が

「えーと、あの、虚ちゃん？」

「なんですかお嬢様、何か言いたいことでも？」（につこり）

「いいえ、なにもございません」

このときの虚ちゃんには私は敵わない

「では、話しはゆつくり、生徒会室で」

「いやー神姫君！助けてー」

「……………無理です☆」（満面の笑み）

絶対楽しんでるよね神姫君！

私は引きずられていく

突然だが私は神姫君が好きだ

これは like じゃないよ、love のほうだよ。

簪ちゃんも神姫君のことが好きみたいね

理由を聞いたら

「私を私として見てくれる、それに優しいし、一緒にいるととても楽しいから」って答えた

私が好きな理由は

もちろん一緒に話したりしてて楽しいと思っっている

それになんだかんだ言っただけいつも私の

わがままを聞いてくれるほど彼は優しい。

でも一番の理由は。

少し前に私が本当に辛かった時があった、

なぜなら私は

IS 学園生徒会長であり

更識家 17 代目楯無でもあるので

仕事をやってもやりきれないほどある

そこにI S学園への男子生徒入学だ

仕事は倍以上になった

そんなときに

「楯無さん、すごいつらそうですね」

神姫君はそう言った

おかしいな、普段から私はポーカーフェイス、

いや、仮面を被っていると言った方がいいだろう

それを神姫君は見破った。恐ろしい観察眼だ

「あら、わかっちゃった？」

「はい、目に見えて辛そうなので」

「これじゃあ楯無失格ね」

「そんなことないですよ、どうせ仕事が増えたとかなんとかでしょう？しかも俺達関係の」

「鋭いわね、そうよ。あなたたちを護衛しろだの。

そんなのばっかりよ」

「じゃあ俺も手伝いますよ」

「だめよ私はこれでも生徒会長よ、一般生徒のあなたには手伝わせないわよ」

「そんなことを言つても、顔に出てますよ」

「え、ほんとに？」

「嘘です」

「もーなによー！」

「でも、楯無さんが本当は手伝つて欲しいっていうことは

わかりましたよ」

「ああ！かまかけたわね！」

「はい、かけましたよ。」

悪びれもなくそう言うすると神姫君は真面目な顔になり

「楯無さん、楯無さんが俺を頼るなら、頼り続ける限り

俺は楯無さんを手伝い続けましょう。」

だから、我慢しないでください、楯無さんのそんな顔は

見たくない、いつもの美人な顔の楯無さんのほうが

100倍良いですよ」

そんなことを言われた、なにこれ、一種のプロポーズ

みたいじゃない、でも神姫君はそんなことを一ミリも

思つてないんだろうなあ。神姫君も一夏君と同じような

鈍感だと思う。

でも、そんなこと神姫に言われたら私は、：

「じゃあ、頼つても良いの？」

「良いですよ、仕事を手伝って欲しければ手伝って欲しいと言えはいい、生徒会長だつて万能じゃない、

楯無さんだつて一人の女性だ、弱さを外に出せないのは家柄のこともあつてだと思います。

でも、俺の前ぐらいいは弱くたつて良いですよ。

人は支え合つて生きていくものですからね

その時、私は溜まっていたものを神姫君に吐き出した

「しんき、くん、うわあああああああああああつ」

私は何故か泣いてしまった本当に辛かつたんだらうなあ

彼はそんな私の頭をずつとなで続けていてくれた

「ごめんなさいね、神姫君、突然、泣いちやつて」

なき終つたあと神姫君に謝つた

「いいえ、大丈夫ですよ、頼つてと言つたのは俺ですからね」

「ありがとう、それにしても、恥ずかしいわね」

泣いてるとこ見られちゃって」

「それほど楯無さんも辛かったんでしょう、

仕方ないですよ、そればかりは。」

「それで、その、仕事、手伝ってくれる？」

私が言うと彼は笑顔で

「もちろん！」

と言ってくれた

そのときから私は彼のことが好きだったのだろう

暇があれば彼の部屋に行き、話したり、遊んだりする

そんな日々がとても私は楽しい。

彼はわたしに頼れと言った、今度は私が彼を頼らせてあげよう。

いいえ、私だけじゃない、簪ちゃんにも頼ってもらおう

簪ちゃんとはライバルでもあるけど

姉妹だから、これからも仲良くいたい

神姫君、こんな美人姉妹のハーレムなんて滅多に無いわよ？

早く気付いてね。

でないとまた神姫君のことが好きな子が増えちゃうじゃない。

でも私は絶対に彼を

「フフフフ、神姫君すぐに私に振り向かせてあげるわ」

「はいはい、わかりましたからお嬢様、早く仕事を終わらせてください」

「わ、わかっているわよ」

よ、よし！仕事終わったら神姫の部屋にでもいきましよう。

そんなことを思いながら私は仕事を物凄いスピードで

終わらせていくのだった。

おまけ

神姫を好きになる人はほとんどの人間が

疑心暗鬼に陥る

その理由は

「私はシヨタコンじゃない私はシヨタコンじゃない私はシヨタコンじゃない私はシヨタ

コンじゃない私はシヨタコンじゃない私はシヨタコンじゃない私はシヨタコンじゃない。あ、でもシヨタコンでもいいかも。」

という危ない犯罪者予備軍への入り口に立つ

現在神姫の身長136cm

以上神姫ラヴァーズへの試練でした

どうでも良い情報ほど記憶に残っている

今俺は整備室にいる

理由は簪に打鉄式式の整備を手伝ってくれと言われて

整備をしているという具合だ

ただいまの時間朝の4時30分

「なあ簪、コイツの容量まだ結構空いてるよな」

「うん、あまり武装がないから。」

「なら俺の作った武装を入れてくれないか？」

「どういうものを作ったの？」

おれは粒子変換して取り出す

「二つあるんだけど、一つはアフターバーナーって言って、簡単に言えば追加のスラスターみたいなものだ」

「……………もう一つは？」

おれはもうひとつも取り出す

「ハイメガキャノン砲だよ、腹部に付けて使うんだ。」

「威力はどれくらいなの？」

「フルパワーで撃てば零落白夜の3倍ぐらいの威力だ」

「……………」

あれ？なんか唾然としてる？

「で、でもそんなの腹部に着けたら反動でこつちが

飛んでっちゃう」

「ああ、それはちゃんと考えて、俺自作の

衝撃緩和システムを取り付けてある、

それさえあればフルパワーで撃ってもお腹に少し

衝撃が来るぐらいだ」

そう言うと簪は少し悩む仕草をする

「……………わかった、つけてみる。」

アフターバーナーを着けたら今までよりどのくらい

出力が上がるの？」

「そうだなあ、打鉄式式なら1.5倍ぐらいになるはずだ」

「そう、神姫、ありがとう」

「いやいや、こつちこそありがとうだよ、

俺の作った武装を使ってくれて」

「取り付け終わったよ」

「よしっなら部屋に戻るか」

「うん」

お互い部屋に戻る

「うーん、まだ五時か、剣道場にも行くか」

神姫移動中

「ついたな、よし」

俺は木刀を取りだし素振りをする

「こんな朝から練習とは、兄とは違うようだな、神姫」

「千冬姉さんこそ、こんな朝から何をしてるんですか？」

「織斑先生と、いや、まあいい、今は勤務時間外だからな。私か？なあに少し体を動かしてきただけだ」

そういつて千冬姉さんも木刀を取り出す

「神姫、少し相手をしてくれないか？」

「まさか千冬姉さんからご指名とは、いいよ相手をすればいいんだね」

「ああ、では、いくぞ！」

一瞬で俺との間合いを詰めてくる、早い

千冬姉さんの剣はとにかく鋭い。

木刀で鉄も切れそうなほど鋭い。

「くっ、流石に強いな、千冬姉さんは、」

「神姫だつて、私の剣を全部流してるじゃないか」

そう、俺は千冬姉さんの剣を全てギリギリで流している
でもこれはあることをするために必要な事だから

「いやー見切るためにはこの位しないといけないからね」

「私の剣技、そう簡単に見切れるものか」

「いいや、もう見切った」

テツテレーン神姫は模ブレイド○テイル剣技

を発動した！

「なに？」

神姫の太刀筋が変わった、しかもこれは、、、

「驚いたかい？千冬姉さん。」

「ああ、まさかここまで強いとはな」

今神姫がやっているのはお互いの剣を相殺する事

私が剣を振れば神姫はその正反対の方向、

正反対の角度、そして同じ力量で剣を振ってくる

こんなこと普通の人間ができることではない

神姫、お前は一体何者なんだ？

チートですね、はい。

お互いたつぷり30分間切り合ってそろそろいい時間だろう

「神姫、そろそろ時間だ、運動に付き合ってくれて

ありがとう」

「いやいや、俺もいい運動になったよ千冬姉さん。」

「次にやる時は本気で行くからな」

「こつちこそ、千冬姉さんの剣技じゃなくて

自分の剣技で行かせてもらうからね」

「ハハハ、それは楽しみだ。それと、神姫。」

千冬姉さんはこちらを向き

「いつか、お前のことを話してくれるのを私は待っているぞ」

そういつて剣道場を去っていった

「うーん、千冬姉さんは知らないほうがいいと思うなあ」

白騎士のせいで家族が無くなりましたなんて言ったら
どうなることか

ついでに俺が転生者なんて言えばどうなることか

「まあいいや、いつかって言ったんだから
ずーつと後でも」

俺は部屋に戻りシャワーを浴びて

制服に着替えた

「ごっはんーごっはんー♪」

寮の廊下をスキップしながら通る

その姿はまさに遠足前の小学生のようだったと

周りの女生徒は語る。

俺は今食堂にいます。

ちなみに食堂に来たのは初めてです

何でかって？

いつもはそんな余裕がないからだ！

今日早いのは朝4時くらいに簪から

電話があったからね

という訳で俺は久しぶりに朝御飯を食べるのだ

俺は食券を買おうとする

……

欲しいところに手が届きません

欲しいのは梅茶漬け定食だ

「ぐぬぬぬ、なぜだ、なぜ届かない！」

「神姫、どうしたの？」

「くっ、あれ？簪か？」

「うん、で、どうしたの？」

「食券に手が届かないんだ」

「何が欲しいの？」

「あの梅茶漬け定食ってやつだ」

俺がそういうと簪は梅茶漬け定食のボタンを押す

「はい、どうぞ」

「おお！ありがとう簪！」

簪さん、すげえっす！

「／＼う、うん。どういたしまして」／＼／

うん？顔が赤いぞ？なるほどお

感謝されることになれていなくて照れてるんだな！

よしっ今度から簪が何かしてくれるたびに

褒めちぎってやろう。

とりあえず今は

「よっしやあ！飯だー（ノー——）ノ」

「し、神姫。一緒に食べてもいい？」

「もちろんさあ」

「そういえば今日、中国から代表候補生が

転入してくるって」

「え、ほんとに？」

「うん、しかも専用機持ちの」

「へえー大方俺たちのデータを取りにだらうなあ」

「だらうね、神姫、気を付けてね」

「わかったよ、こちそうさまー！」

おいしかったなー

俺達はそれぞれの教室に向かう

「じゃあ、私はここだから」

「おう、じゃまたなー」

教室の前まで行くと入り口に人がたっていた

「ねえ、君、ちよつと退いてくれない？」

俺がそういうと、彼女は振り向き

「なによー！うるさいわね！」

こちらを向いてそういった

あれ？この顔は

「お前鈴か？」

「あれ？神姫？」

「おお、やっぱり鈴だ久しぶりー」

「あんたこそ、まったく身長変わってないわね」

「ひどいなあこれでも結構伸びたぞ」

「おい」

ん、この殺気は！まずい！退避ー！

俺は横に飛ぶ

するといままで俺の頭があつた場所に出席簿が降り下ろされた

月牙天衝！違うか

「ち、千冬さん」

「織斑先生と呼べ。さつさと戻れ、そして入り口を塞ぐな、邪魔だ。」

「す、すみません」

り、鈴がびびびつてる、織斑先生、なんて霊圧だ。

「またあとでくるからね！逃げないでよ、一夏！」

あーあそんなこと言っちゃって

「さつさと戻れ」

「は、はいっ！」

ほらほらしくしかられてやんの

バシン

「織斑弟、さつさと教室に入れ」

「わかりました織斑先生」

俺は教室に入る。あ、また一夏叩かれてる

「なあ、一夏。鈴って今日転入してきたのか？」

「みたいだな、しかも中国の代表候補生だつてさ」

うん、知ってた

その後授業中に箒さんとオルコツトさんが織斑先生に
何度も叩かれていて正直ザマアとか思った

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわー！」

おろろ？これは危険な空気だ

お邪魔はさっさと退散しよう。

べ、別に、怖かったとかそういうものじゃないからね！

ほ、本当だよ！

神姫移動中

食堂につくと鈴がいた

「鈴、何やってんだ？」

「決まってるでしょ！一夏をまってるのよ」

「いやーハーレムキングは羨ましいっすねー」

「え、ハーレムってなによ！」

「いやいやー既に一夏のハーレムウイルスは

学園に広がっているのだ！」

「な、なんですって！これは尋問しなきゃいけないわね」

一夏よ御愁傷様。合掌

「じゃあ俺は向こうで食べるから、こっちくんなよー」

「なんでよー！」

「お前らが来ると、絶対修羅場になるから」

「そ、そんなこと「ない」と言い切れるの？」無理よ！」

「ということだから、じゃあねー、あと、

ラーメンのびるぞー」

「わかってるわよー！」

おれは券売機に向かう

そこでまた問題が発生した

「……………また手が届かない」

え、なんなの俺早くご飯食べたいんだけど

「あらー神姫君、手が届かないの?」

うわ、一番来てほしくない人が

「そうですよ、楯無さん」

「あらあらーなんならおねーさん代わりにボタンを押してあげましょうか?」

「……………押してくれるんですか?」

「もちろん!そ・の・か・わ・りー」

物を頼むときはそれ相応の頼みかたがあるんじゃないかしら

やつぱりかー!だからいやだったんだよ

絶対遊ぶから

「……………楯無さん、ボタンを押してくれませんか?」

やべー少し泣きそうになったよ

あれ?何か周りの皆さん鼻をおさえて何やってんだ?

まあそれより

「楯無さん!はやく!早く押してください!」

「……………はっ!私は何を!ええ、どのボタンを

「押せば良いの?」

「サーモンフライ定食です」

「そういうと楯無さんはボタンを押ししてくれた

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます!」

「めっしだめしだー」

「俺はさつき来た一夏たちよりずっと遠くに座る

そのとなりに楯無さんも座ってきた

「一夏くんたちのところになくてもいいの?」

「あんなハーレムキングのところにいるなら

楯無さんというほうがマシですよ」

「なによそれ、ひどくない?」

「ひどくないと思いますけどねえ」

「それはまあおいといて、神姫君、今日の放課後

生徒会室に来て」

「何ですか?」

「……………仕事を手伝ってください」

「はあ、わかりましたよ、授業が終わったら行きます」

「ありがとう神姫君！」

「それよりさっさと食べないと鬼姉が来ますから」

「誰が鬼姉だつて？」

びたっ

俺の動きが止まる。あ、楯無さんが逃げた

「い、いやー誰のことつすかね本当」

「本当、誰だろうな？」

「あはは、決まってるじゃないですか、

それはあなただ！」（レ○トン風）

スパアンツスパンスパパパンツ

本当、あの姉は弟をなんだと思ってるんだらうね？

太鼓の○人だったらフルコンボだドン！だよ

放課後俺は生徒会室に向かう

そこから生徒会の仕事をみっちり手伝った
虚さんと千冬姉さんはヤヴァイ

そんなことを思いながら寮へと帰ると

自販機の横で泣いている鈴の姿が

「なに泣いてんだよ鈴」

「あれ？神、姫？」

「当たり前だろう？それいがい誰がいるんだよ。

それよりなんで泣いてるんだ？」

「それは、、、」

長いので要約

まず

鈴が、国に帰るときに一夏に告白する

II

そして今一夏に約束を覚えてるかと聞く

II

一夏は覚えているが理由を履き違えている

鈴が泣く

II

一夏馬に蹴られて死ね！

だそうです。

鈴が一夏に告白したところは俺と弾と数馬で見えていた
三人ともめっちゃニヤケ顔で

「でも鈴、お前のあの告白もどうかと思うぞ」

「ど、どうしてよ！」

「お前あの愚兄がハーレムキングの唐変木って

知ってるだろ？」

「当たり前でしょ、何年一緒に居たと思ってるのよ」

「ならく毎日私の作った酢豚を食べてくれる？>なんて

わかるわけないだろ？」

「あ」

「いいか？あいつに気づいてもらうには

ド直球に好きです！ぐらい言わないと無理だぞ。

永遠に」

「それも、そうね」

「で、今のことを含め鈴は一夏のことを許すのか？」

「あつちが謝ってきたら許すわよ」

「ふーんわかった、じゃ俺に迷惑をかけないように」

「結局自分のこと!?!」

「当たり前体操♪」

そういつて俺は部屋に戻る

いやー楽しみだなあクラス対抗戦、1回戦が

鈴対一夏だもんなあ

なぜしているのかというと、実はこの対戦表

おれが作ったのだ

生徒会の仕事でこれを決めておいてと言われたので

ちよちよいと決めました

そんなことを思いながら俺は部屋に帰り

眠るのだった

チートに常識など存在しない

今日はクラス對抗戦の日だよー

え？早いって？

だってなにもなかったんだもん。

でもそういえばこの前一夏が鈴に余計なことを言つて怒らせてたな。

トラブルメーカー一夏、ここに参上！みたいな？

そして現在私はピットにいます

ここが一番見やすいからね！

お、二人ともI Sを展開した。

鈴のI S、シェンロン甲龍というらしい。

うん、あれだよね。いでよ！○○！だよね

鈴に向かって願い事をすれば叶うだろうか？

『試合、開始！』

始まったな

鈴が青竜刀みたいな剣を2本出して振り回してる

こら！お子様がそんなもので遊んじやいけません！

こうやって見てると一夏が強くなっているのが

わかる。たかが1週間程度でここまで強くなるものなのか？

(神姫君、これが主人公補正さ)

出てきたな忘れ去られたキャラその名も神

(ひどいなあ、まあ確かに忘れ去られたっほいけど)

そろそろお前に名前をつけようと思うんだ

(君に任せるとろくな名前にならない気がするよ)

まあまあまかせろって

うーんそうだなあテンテでどうだ？

(それあの神さまだよね!?)

名前が違うだろ

(いやいや、濁点を取っただけじゃないか!)

えー良い名前だと思っただけになあー

(絶対甲龍をみて考えたでしょ)

まあな

(もつと真面目に考えてよ！)

じゃあキラクスな

由来はSEEDのあの二人の名前の合体だ

(テンテよりマシだよ)

よろしくな、神改めキラクス。

(うん、よろしく)

そういつてキラクスは念話を切った

そのとき

スドーン

アリーナのシールドを突き破り何かが侵入してきた

「織斑先生、あれは何ですか？」

俺は隣にいた千冬姉さんに聞く

「わからない、だが、わかっていることはある、

一つはあのISの攻撃はアリーナのシールドを

貫通できる。もう一つは現在アリーナのすべての

扉をロックされているので今はあいつらに

任せるしかない」

「織斑先生！大変です！ISがほかにも6機！

学園に侵入してきました！」

「なに！くそつ今専用機持ちはほとんどが避難作業

を行っている、どうすれば」

「織斑先生、俺が行きますよ」

「だが今扉は全てロックされている」

「それならもう解除しました」

「なんだと!?!……わかった行行ってこい」

「神姫君、現在ISは一機は整備場の方に

後の五機は全て固まって移動しています」

「わかりました、俺は五機の方へ向かいます。

オルコットさん、あなたは一夏の方に向かってください」

「わかりましたわ、でも、神姫さんこそ大丈夫ですかの？」

「

ああ、大丈夫だ、問題ない」

そういつて俺はピットから出る

「えーっと整備場のほうにいるのは簪か」

俺は通信を繋ぐ

『簪！聞こえてるか？』

『大丈夫、聞こえてる』

『今起こっていることはわかってるはずだ、

簪はそっちに行つたISの相手をしてほしい』

『わかつた、こつちからも見えてきた』

『じゃよろしく！』

俺は通信を切る

「さてと、やりますか！バイパー！」

バイパーを展開する

「今回は同調能力は使えない、あれは一度に一機しか
できないからな。」

俺は目標がある場所についた

「あれ？いない、どうして、」

と、思ったそのとき

いきなり俺の周りにISが現れた

「しまった！ステルスか！」

五機は右手を上げこちらに向ける

「まずいな、これはよけれないぜ」

相手のISから一斉に巨大なビームが発射された

次の瞬間俺は光に包まれた

side 簪

私は今学園に侵入してきたISと戦っている

相手は武器が右手しかないのか

ビームを撃ったり

殴りかかってきたりしかしていない

でもそれが結構脅威だ

私はそれでなかなか近づけないでいる

「くっ山嵐！」

私は山嵐を全弾撃つ

山嵐はいつのまにか神姫に改造されており
48発だったのが80発になっていた
ほとんどが被弾し私は勝ちを確信した
だが

ギギギギガガ

機械が軋む音が聞こえる

煙が晴れるとこちらに向かって右手を上げている

ISが一機

しまったと思った、相手のISには

既にエネルギーがチャージされている

何か手は、そう思ったとき私は

思い出した、神姫にもらった武装のことを

私は即座にハイメガキャノンを展開する

それと同時に相手も撃ってきた

「これで、終わりー！」

私はフルパワーでハイメガキャノンを撃つ

それは相手のビームとぶつかり一瞬で

相手を呑み込んだ

「え、」

予想外の威力だった

撃ち終わった後には

形がまったく残っていないISが一機

「あ、操縦者を、」

私はISに駆け寄る

其処にはなにもなかった

「もしかして、無人機？」

そう思うしかなかった

そのときだ

神姫のいる方で大きな光が起こった

「神姫！」

私は神姫のいる方に走り出した

s i d e 神姫

「ふうー危なかったー」

ビームが発射される直前におれは

アブソープシールドを展開し

そしてアブソープビットも展開した

アブソープビットとシールドはあらゆる

ビームやレーザーを吸収しこちらのエネルギーにする

アブソープシステムになっている

そしてそのエネルギーはディスプレイシステムで

使うことができる

「おまえら、いい加減にしろよ」

まったく無人機だからって調子に乗りやがって

なぜ無人機だと知っているのかというと

相手が現れた時に生体スキャンを行い

そのときに生命反応が出なかったために無人機だとわかった

まあそんなことはおいといて

「3秒だ3秒で片付けてやる」

おれはタクティカルアームズをしまい
あるものを展開する

「オーライザーツインドライヴシステム稼働開始」

そしてパイパー内に搭載された

GNドライヴも稼働させる

そして

「トランザム」

機体が赤いオーラに包まれる

さらに

「デイスチャージシステム解放」

おれは吸収したエネルギーを機体性能アップに使う

まだまだ

俺はアシムレイトを発動させる

自分の感覚と機体の感覚を一体化させる

トランザムで3倍デイスチャージで2倍そこから

アシムレイトでさらに3倍上がった

機体性能、総合して1.8倍に上がっている

そのスピードは光を越える

俺はシラヌイとウンリユウを展開する

その瞬間五機が一斉に飛びかかってきた

一瞬。例えISのハイパーセンサーで見ても

俺は動いていないように見えただろう

だが俺は動いた

その証拠に足元には

俺が切り刻みすぎて粉みたいになっている無人機が

五体分ある

俺はトランザム等々を解除する

トランザムの反動で能力がガクツと下がる

「神姫！」

「ん？なんだ簪か！そつちは終わったのか？」

「うん、神姫がくれた武器で助かったよ」

「それは何よりだ、どうやらアーリーナの方も

終わったみたいだ」

「そうなの？、それより無人機は？」

「無人機ってわかったんだな、無人機なら

そこらに落ちてるぞ」

「え？もしかして、この粉みたいなの？」

「もちろんさあ」

「なにやったらこんな風に」

「うーんとにかく切り刻みました」

嘘はいつてないぞただ切るスピードがとんでもなかった
だけだ

「な、なるほど」

「よし簪、アリーナに戻るぞー」

「うん」

俺達は二人でアリーナに戻っていった

side???

「チッ今回は失敗だったか。」

「まあ、たかが無人機ではあいつは倒せませんよ」

「だが俺たちの計画にアイツは邪魔でしかない存在だ

早く消さないといけない」

「まだ焦らなくて良いですよ、時間はまだありますからね」

「それもそうだな、まだ時間はある、

だが早く消しておいたほうが楽だろう?」

「まあ厄介なことをされても困りますしね」

「そういうことだ、次はそうだなあ、

アイツを使おう」

「何ですか?それは?」

「まああとで話してやるよ、フハハハ、

今度こそ殺してやるぞ、『転生者』よ」

そういうと二人はゆつくりと闇に消えていく

原作はゆつくりとそして確実に崩れていく

高校生は少年ですか?青年ですか?

俺は今医務室に向かっている

理由? いやーうちのハーレムキングが無人機と

戦ったあとぶっ倒れましたからね。

ちよつと冷やかしに

俺は医務室のなかにはいる

「よう、へっぽこ兄貴」

「ん? 神姫か、つてなんだよその言い方は!」

「たかがIS一機と戦って気を失うやつなんてへっぽこだろ?」

「うぐつ」

「それより他の人たちは?」

「さつき帰ったよ、俺もそろそろ部屋に行く」

「そうか、なら気をつけて帰れよ」

「お前も一緒だろ?」

「誰がお前みたいなおトコスキーと帰るかよ」

「そ、そうですね！あなたは一般生徒です、ここに

入ってはいけません！」

「そういうならもう少しセキュリティを上げてくださいよ。このドアなんて10秒で突破出来ましたよ？」

「そんな!?!このセキュリティは世界でもトップレベルですよ！」

「なら世界のトップがこの程度ってことでしょう。」

大丈夫です、俺はここにとりあえず来てみたかった

だけですから。」

「ふん、ならさっさと帰れ。用なら済んだだろう」

「それなら帰りますよ、今回の大体の犯人は

織斑先生もわかっているみたいですし。

あと、無人機粉々にしてしまいました」

「まったくだ、何をやったらああなるんだ」

「最近ちよつと体を動かしてなかったもんで、

たまには運動をと」

「お前がいうその運動がすぎすぎるんだ。

今後はやり過ぎるなよ、教師命令だ」

「いえっさー」

そういつて神姫は去っていく

「はあ、あいつの戦闘力は私もわかってないからな。

今後は見極めていくことも必用かもしれんな」

「そうですねー、でも本当に何をしたら

あそこまでISを壊せるのでしょうか？」

「わからん、あと、更識妹が相手をしていた機体も

相当壊れていたらしいな。」

「はい、どうやったのかと聞いたたら、神姫君のくれた

武装で勝てたと言っていました」

「圧倒的身体能力に世界トップレベルのセキュリティを

簡単に突破できるほどの頭脳、そして全ての

ISを操ることのできる謎のISバイパー。」

「彼は一体何者なのでしょう？」

「わからん、家族である私や一夏にも

教えてくれないからな、だが、私は神姫がいつか

自分のことを話すときを待っている」

「ふふふ、そうですね、弟さん思いなんですね」

「……………山田先生、少し武道場に行きましようか」

「え?あ、ちよつとまってください、あ、

いやああああああ!」

その日武道場からは絶叫が響き渡った

無人機襲撃から三日がたった

きようはなんと!箒さんが引越すらしい

超どうでも良い!

その夜僕は見てしまった

「今度の学年別トーナメントで優勝したら。

わ、私と付き合ってもらおう!」

箒さんが一夏に告白するところを

でもね箒さん

その告白では絶対に一夏は気づかないのさ!

「おう、いいぞ」

あーあの答え方は絶対買物だと思ってるね

なんで明日とかじゃなく、優勝したらなんだろう？
とか思ってるねー

ドンマイ箒さん君は言い方を誤ったんだ

俺は部屋へと帰る

今日は日曜日です。

一夏は弾の家に行っています

いいなあなんだよアイツ、行くなら誘えば良いのに
はっ、まさか！あいつ！

マジでそういう趣味だったのか？

そうなると弾も、、、

ガタガタブルブル

俺もいつ襲われるかわからないな

今日は一夏に会わないでおこう

「やっぱハツキ社製のがいいなあ」

「え? そう? ハツキ社ってデザインだけって感じがしない?」

「そのデザインがいいの!」

「私は性能的にみてミューレイのがいいなあ、特に

スムーズモデル」

「あーあれねえ、でも高いじゃん」

月曜日の朝俺は一夏と教室に入っていった

なぜ一夏と一緒なのかというと

一夏が俺をたたき起こしに来たからだ

一夏死すべし

教室では何かみんながワイワイやっている

たしかそろそろISスーツの発注だったな

「そういえば一夏君と神姫君のISスーツって

どこのやつなの? 見たことないけど」

「あー、特注品だって、男用のスーツがなかったから

どっかのラボが作ったらしい、

もとはイングリッド社のストレートアームモデルって聞いている」

良くできました一夏君、君には千冬姉さんの出席簿
をあげよう

「へえー、神姫君は？」

「俺は自分で作った」

どんな形かというどジャージだ

今度一夏にも作ろうかな、ユニコーンのパイロットスーツ

「え!?!自分で作ったの!?!」

「ああ、針とミシンを使ってチクチクと。」

三時間くらいかかったぞ」

何しろジャージだからな、長袖長ズボンはめんどくさかった

普通、ISスーツは肌表面の微弱な電機か何かをキャッチしてISに伝えてISを動

かす。

スーツを着なくてもISは動かせるが、どうしても

鈍ってしまうらしい、まあ俺は普通ではないので

肌が出ていなくても動けるチート万歳

しかも耐久性にも優れていて、拳銃の銃弾なら

受け止めることができる。

そのうち大砲の弾とか受け止めれるんじゃないか?

そんな感じのことを山田先生が言っている

「山ちゃん詳しい!」

「一応先生ですから……山ちゃん?」

「山ピー見直した!」

「今日は皆さんのスーツ申し込み開始日ですからね

予習は完璧です。えへん、……って山ピー?」

入学してから2ヶ月、山田先生には色んな

あだ名がつけられている。

慕われているんだろう、あれ?千冬姉さんは?

いまだに一つもあだ名をつけられていない

そっかあ、あの人、人徳ないんだなあ

人をまるでマ○オのクリボーの如くたたく

おかげで身長が縮む

「あの一、先生をあだ名で呼ぶのはちよつと、」

そうか?中学では青い彗星とか呼ばれていたやつが

……俺でしたね

「えー、いいじゃんいいじゃん」

「まーやんは真面目っ子だなあ」

「ま、まーやんって」

「あれ？マヤマヤのほうがよかった？」

「もー、じゃあもとのヤマヤに戻す？」

「あれはやめてください！」

なにこの過剰反応、ヤマヤにトラウマがあるのか、

にしてもトラウマってなんでトラとウマなんだろう？

誰が語源を教えれくれ

「と、とにかくですね、ちゃんと先生と行って下さい

わかりましたか？わかりましたね？」

無理だろうなあー

いつかはあだ名の数がメダカのなじみさんの能力の数を

越えるかもしれない

「諸君、おはよう」

千冬姉さん降臨！

登場曲ダースペイダー

デッデッデッデッデッデッデッデッデッ、
デッデッデッデッデッデッデッデッデッ、
デッデッデッデッデッデッデッデッデッ
スパアンツ

「朝っぱらから下らんことを考えるな馬鹿者」

なんかばれたんですけどおー

「すいませんでした織斑先生」

「わかればいい」

そういえば千冬姉さんにあだ名を考えるんだったな

ちふゆだからちゆちゆでいつか

「織斑弟、貴様今何を考えていた」

「え、なにも考えてなどいませんで！」

なんか喋り方がおかしくなったな

「正直に答えたほうが身のためだぞ」

「えーつとですね、山田先生のように生徒から

あだ名をつけられるということは、みんなから慕われていることと同じだと思うんです。

なので織斑先生にもあだ名をつけて上げれば
生徒との距離が近づき

彼氏いない歴〓年齢の理由である

気難しい顔、まるで軍曹のような性格、
が少しは治るとおもうんです

だからまだ遅くはありません！

24才でもまだ手遅れではない！

例え今家事が一切合切できなくても！

私生活がのび太くんぐらいひどくても！

まだ時間はあります！

なのであだ名をつけようと思いましたが

言い終わった瞬間俺はとんでもないことをしたと気づく

「ほう、言いたいことはそれだけか」

あ、千冬姉さんの後に魔神グレイトが見える

周りを見るとみんなが震えている

この根性なしめ！

という俺も震えている

「最後に一つ、千冬姉さん」

「なんだ」

「怒っちゃやーよ☆」

ズドン！

頭に隕石が落ちてきた

現在神姫君の頭は机にめり込んでいます

「お前ら、さつき神姫が言っていたことは忘れろ」

「証拠隠滅は……最低だぞー」

俺は最後の力を振り絞る

ズドン！

さらにもう一段階めり込んだ

「い い な?」

「「「「はい!」」」」」

「き、恐怖で生徒を支配する……それがお前のやり方かー」

ズドン！ バキッ

めり込みすぎて机が真つ二つに割れた

俺は椅子に座る

「織斑弟、今度こんなことを言ったら……………」
「わかってるな？」

「わかりました」

ワツカンナーイとか言おうかなーって思ったが
そろそろ廊下にいる3人を教室に入れてあげよう

「織斑先生、はじめましょうか」

「誰のせいで遅くなったかと思っている」

「そ、それではSHRをはじめますね！

なんと今日は転校生が3人もいるんです！」

みんながえー！ってなってる

なんでこのクラスに集中するんだよこのやろう

「では、入ってきてください」

そういわれ3人も入ってくる

同時にバイパーのセンサーだけ展開する

一人は、男装だな、もう一人は女か

だけど最後の一人は……………完璧に男だ

そいつはぞくにいうイケメンだ

一夏と同じくらいイケメンだろう

(神姫君、あの男は)

ああ、わかってるさ

あいつは絶対に

(転生者だ)

(気を付けたほうがいい、神姫君)

わかつてる、あいつがもらった特典からは

闇の力がする

(恐らく彼は君を殺しに来るだろうね)

たぶんな、最近は何だか怪しい動きがあるからな

(こつちも彼を転生させた神を探すから)

よろしく頼むぜ

念話を切る

ちようど彼の自己紹介だ

「山本^{やまもと} 啓太^{けいた}だ、よろしくな」

X祭りー

自己紹介が終わったあと

俺と一夏がドイツから来たラウラ・ボーデヴィツヒ

さんにビンタされた。

俺は山本とかいう転生者に俺が弱いと思わせるためにわざと叩かれ少し大袈裟にぶっ飛んだ

「織斑兄弟、デュノアと山本の面倒を見てやれ、

それでは解散！」

デュノアとは男装している子のことだ

シャルルデュノアと言うらしい

「えーつと、君が織斑、一夏君？」

「自己紹介は後だ、早く教室を出ないと

女子達を着替え始めるから」

一夏はデュノアさんの手を引っ張り

教室を出ていく

俺も教室を出ようとしたら山本くんに声をかけられた

「おい、織斑神姫、いや、転生者」

「なにかな？早くしないと遅刻するよ？」

「今日の放課後、第2アリーナに来い、

これは決定事項だ」

「ずいぶんと勝手な物言いだなあもう少し仲良く

しようよ山本君」

「うるさい！で、お前はどんな特典を貰ったんだ？」

あれ？コイツ知らないの？

てつきり俺の力を知ってると思ったんだけどな

「俺はなにも貰ってないよ」

「なんだよお前、転生させてもらったただけで

なにもないのか。ならお前を消すのは簡単だな」

なんだコイツ、油断しすぎだろ

慢心せずしてなにか王か

ギルガメッシュじゃないんだから

「消す？なんのこことだい？」

「詳しいことはアリーナ放課後話してやるよ。」

それまでせいぜい最後の学園生活を楽しむんだな」

そういつて山本君は去っていく

あ、俺もいかなきゃ、

遅刻しました☆

「織斑弟、なぜ遅刻した」

「頭にできたたんこぶを冷やしていました」

たんこぶができたのは事実だ

「自業自得だろう」

「俺は織斑先生のことを思っただけで言っただけですけどねえ」

「なに？」

「いえ、なんでもありません」

おー怖い怖い地雷を踏むところだった

「さて、今日は戦闘を実演してもらおう

オルコット、鳳！出てこい」

「なぜわたくしなのですか!？」

「なんで私何ですか!？」

「ふん、先程まで元気に織斑兄と遊んでいたじゃないか

。それに専用機持ちならすぐに始められる」

二人とも、諦めるんだ、このひとの前では

松○修造も諦める

俺はそう思い二人を眺めていたが

千冬姉さんが二人に耳打ちをした瞬間

二人はやる気になった

どうせ一夏関連だろう

「織斑先生！対戦相手はだれですの？わたくしは鈴さん

でも構いませんが」

「その言葉、そっくりそのまま返すわよ」

「慌てるな、対戦相手はー」

あ、上からなんか降ってきた

「ああああーみなさんー！どいてくださいー!」

あれは被害がこっちまでくるな

そう思って俺はグレイザーを起動する

俺の3つ目のIS、グレイザーの能力を発動する

「clock up」

カ〇トでしたー

世界が止まる

実際には時は進んでいる、簡単にいうと今の俺は、

1分の間に一時間分ぐらい動ける

その間に俺はみんなを遠くに移動させる

一夏を除いて

「clock over」

俺はグレイザーを解除する

「あれ？いつの間にこんなところに」

みんなが驚いている、山本君がこつちを見てきたので

俺も驚いたふりをする

ドーン

山田先生墜落、ちょうど一夏がいたところに

煙が晴れると、山田先生の上に一夏が

白式を展開した状態で乗っかっていて

一夏が山田先生の胸をさわっていた

キヤー——一夏変態！スケベ！犯罪者——！

「そ、そのですね？困ります、こんなところで。

いや!?場所だけじゃないですよ？

私たちは教師と生徒でなんて、、、

で、でもしたら織斑先生が姉で

神姫君が弟に、それはそれで魅力的な——」

あれでも教師なんだよな？教師だよな？

そんなことを考えていたら一夏に

レーザーが飛んできた

一夏はそれをギリギリよける

「ホホホホ………残念です、外してしまいました」

オルコツトさん、怖いです

ガシャン

今度は鈴が双天牙月を2本から

1本に繋げ一夏に投擲した

一夏はそれも避けたが双天牙月がブーメランの
ように一夏に襲い掛かる

ドン！ドン！

2回発砲の音がして双天牙月は打ち落とされた
打ち落とした人物はなんと山田先生だった
能ある鷹は爪を隠すと言うが

山田先生の場合は爪じゃなく刀だろうな

「山田先生はこうみえて元代表候補生だからな、

これくらいのは事は造作もない」

「いえいえ、代表候補生止まりでしたから」

へえー凄いなー強そうだなー（棒）

「さて小娘ども、いつまで惚けているつもりだ

さっさと始めるぞ」

「で、でも2体1で」

「安心しろ、今のお前たちならすぐ負ける」

その言葉で鈴とオルコットさんのヤル気スイッチが
入った

「では、始め！」

さあ！ 始めました！

生徒対教師！

今だけは日ごろ忌々しい教師を合法的にボコボコにできる時間です！

でもあの二人じゃ無理だな、うん

「今のうちに、そうだなデュノア！」

山田先生の使っている I S の説明をして見せろ」

「は、はいっ！」

俺はその間にキラクスを呼び出す

(どうしたんだい神姫君)

あの転生者についてなにかわかったか？

(彼を転生させた神は逃がしちゃったけど、

彼に渡した特典はわかったよ)

どんなのだ？

(まず、I S の専用機だね、機体まではわからなかった。

それと織斑千冬並みの身体能力と

ISについての全ての知識、後はイケメソにさせてくれること、最後に、原作キャラには絶対に勝てる能力だつて)

あいつ貰いすぎじゃね？

(普通はそんなもんだよ、君みたいに)

何度も転生して行くせにもらった特典が

全て合わせて一回だけなんていないと思うよ？)

へえーでも正直もう特典なんて貰っても

意味無いんだよなあー

(君にとつてはね)

まああいつは今日倒す予定だから大丈夫だろ

(わかったよ、それじゃあ頑張つてねー♪)

念話終了

そして向こうの戦闘も終わったみたいだ

結果は山田先生圧勝

山田先生凄いな！

鈴とオルコットさんは機体の相性はいいのに

二人の相性が良くない

今も喧嘩してる

「さて、これでIS学園の教師の実力がわかったはずだ
以後は敬意を持つて接するように、いいな?」

「「はいー」」

「専用機持ちは織斑兄弟、オルコット、凰、デユノア、

ボーデヴィツヒ、山本の7人だな、

それでは各専用機持ちの場所に並べ、

これより実習を行う。

グループリーダーは専用機持ちがやること、

いいな、では、別れろ」

そういつた瞬間男子達に皆が寄っていく

やめろお、そんな事をするよ

「馬鹿者どもが、出席番号順に各グループへはいれ!

もたついたやつはISを背負ってグラウンドを

100周させるからな」

皆が瞬間移動したような早さで

散らばる。

「こういうときの素早さはなんなのか

「よろしくね！神姫君」

「うん！じゃあ俺はISを取ってくるよ」

俺は訓練機を取りに行く

「はいはい、皆さん、鍛代を取りに来てくださいねー

機体の数は、ラファールが3機、打鉄が4機です！

早い者勝ちですよー」

なんか山田先生がいつになくしっかきしている

明日は前例のない天気かもしれない

俺は打鉄をゲットしてみんなのもとに向かう

「それじゃあみんな、1列にならんでね！

まずはISの起動と歩行までやってもらうよ」

「「はー」」

うんうん理解が早い子は好きだよ

ちやくちやくと進んでいく練習

やっぱりみんなエリートなんだよなあ

操縦が上手い、

そんなことを考えてるうちに

次の人の順番が来ていた

「ね、ねえ神姫君」

「ん？なに？」

「あのー届かないんだけど」

「あちゃーやっちゃったか」

訓練機は専用機のように粒子化しないため

人が降りてしまえば動かなくなる

それでたまにあるのがISを立たせたまま降りてしまうこと。

それにより次の人が乗れなくなる。足が届かないせいで

そういうときの対処法は、、、

「わかった、じゃあ今から俺がISを使ってのせるけど

いい？」

ちなみにこの子は夜影 玲奈という

「え!?も、もちろん！」

よしOKはもらったこれで俺は訴えられない

「い〜くよ〜」

「うん！」

俺は夜影さんを抱える

もちろんバイパーを展開してだ

少し上がり夜影さんが乗りやすい場所まで移動する

「ここに手を掛ければ簡単に乗れるよ」

「わかった！」

少し焦っているのか急いで乗ろうとする

だが

ズルッ

「ああ！」

夜影さんが足を滑らせそのまま地面に落ちる

俺は地面に落ちる前に素早く移動し

夜影さんを受け止める

「危なかったー、大丈夫？怪我してない？」

「う、うん大丈夫、ありがとう／＼／＼」

よかったー

「じゃあもう一回上まで行くからね、今度は焦っちゃダメだよ？」

「うん、今度は大丈夫、多分」

なんか心配だなあ

今度はゆっくり下ろす

「そこに手をかけてね、あと足はそこに

後は体を預けるだけ」

夜影さんが乗るとISは起動する

そのあと歩行をして難なく終わった

だが

「神姫くん、」

「なに？」

「あの、ミスしちやってまた、その、」

「また、立たせたまま降りちやったの？」

「うん」

「仕方ないなあー」

俺出動

「ヤッホーしんしん」

「次はのほほんさんだったのか」

「そうだよーしんしん、早く早くー」

「わかってるって」

俺はのほほんさんを抱えてISにのせる

のほほんさんはISの操縦が他の子よりも上手い

いや、慣れてるって言った方がいいな

まあ更識家に使えてる布仏家だからかなあ

そのあとは滞りなく練習が進み

授業が終わっていった

授業が終わわりISも片づけ終わった頃、

俺は着替えようと更衣室へと向かおうとしたが

一夏がデュノアさんに絡んでいたので

ちよつと止めさせる

「おい、オトコスキー」

「ん？なんだ神姫か、ってなんでまたオトコスキーなんて呼ばれるんだよ！」

「そんなにしつこくデュノア君に絡んでたら

そう思えるだろ」

「そ、それはさあ、シャルルと着替えたくて」

「一夏、男が増えて嬉しい気持ちにはわかるけどさあ

もう少し落ち着こうよ、一夏に変な噂がたつてもいいの？」

「それはこまるな、じゃあシャルル！後で一緒に飯食おうぜ！神姫も一緒に！」

「まあたまにはいいよ、デュノア君は？」

「うん、僕もいいよ」

「そっか、なら俺は着替えてくるぜ！」

一夏は去っていく

俺も行くかあー

「おい、転生者」

「その呼び方はやめてくれない？山本くん」

「嫌だね、どうせ今日無くなる命だ、

お前の名前なんて覚えても無駄だろう？」

「あつそ、で？お前はデュノア君のこと気づいてるのか？」

「当然だろ？こつちは原作知識があるんだ、

これから起こることも全てわかってるんだよ」

「そうか、まあいい、それじゃあまたな」

「今から食う飯はさしずめ最後の晩餐っていったところか？」
うるせえよ！どんだけ自信満々なんだよ！

つうかさつきから最後の〜とか
イラつくんですけど！

「じゃあ俺はおいしいおいしいご飯でも食べますよ」

「せいぜい味わえよ」

決めたあいつはふるぼっこだ
心をへし折って殺す

ご飯だよ！

俺たちは今屋上にいる

ついでにメンバーは

俺

デュノアさん

一夏

一夏ラヴァーズの3人

です！

すげー俺とデユノアさんが

空気になってる

お前らの席ねえから！

ってなってる

「アハハ、僕達なんか邪魔じゃない？」

「今この空間を我慢するか、後で一夏に＜なんて来なかったんだよ！＞の説教を受ける

かどっちがいい？」

「今を我慢するよ」

うんうんいい選択だ

そのあとはみんな楽しくご飯を食べました

追伸

オルコットさんの料理はパンデモニウムだった

放課後！

さあ、ついにやって参りました

転生者同士の戦いです、

この戦い、負けたら死ぬ

「よう！まっつたぜ！」

「あっそ、」

「チツまあいい、俺はお前を倒して本当に転生者になるんだ！」

「どういう意味だ？」

「転生させてくれた神に言われたんだよく転生して一週間以内にお前を殺さなければ、俺を輪廻の輪に戻す」

「ってな」

「ふーん、まあいいやさつさとはじめようよ」

「そうだな、今このアリーナには人は

入ってこれない！いくぞ！ダークマター！」

山本くんはI Sを展開する

全身装甲のその機体はまさしく

「いいなあそれ、エクシアダークマターじゃんか」

「この機体を知っているのか？」

「なんだよ、お前は知らないのか？」

「ああ、俺はただこれを使えとしか言われてないからな」

「へえー、じゃ俺も」

俺はグロスを展開する

ちなみにグロスは蒼き彗星とか言われてた時と比べ

相当形が変わっている

あの遊び心満載の名前の武装も無い

俺はグロスの超魔改造を施した

「さて、やろうか山本くん」

「いくぞでおおお！」

エクシアはダークマターライフルを使って撃ってくる。

俺は背中のバックパックを起動させる

「サテライトキャノンチャージ開始」

今は太陽光で充電出きるようにしてある

「よそて見は禁物だぞおお！」

今度はダークマターブレイドでかかってくる

俺はマグナムレールガンを使い

近づけさせない

「無駄無駄無駄無駄無駄あー！」

さつきからあいつうるさいんだけど

俺はピーコックスマツシャーを展開して放つ

計9門から放たれるビーム

山本は全てをかわすのは無理と判断し

ライフルとシールドを駆使して撃ち落とす

3つが被弾した

煙の中から山本が出てくる

ブライニクルブレイドを持ってこちらに斬りかかってきた

俺は

ムラマサブラスターを展開し対抗する

余談だが俺はX1フルクロスが結構すきだ

山本が上から降り下ろしてきたものを

ムラマサブラスターで受け流しつつ俺は

空いている左手にブランドマーカ―を装着して

山本に突き刺す

「ぐあぁっ」

サテライトはまだ充電完了の知らせをしない

そんなときに

「トランザム！」

もとから赤かった機体をさらに赤くさせて

山本はこっちに向かってきた

「ハハハハ！今の俺は全てが3倍だぁ！」

とうとう最終手段か、俺は山本に向けて

ムラマサブラスターを2本展開して

「いくぞ！山本！必殺ファンクション！」

ダンボー○戦記です

「アタックファンクション、コスモスラッシュ！」

機体から音声が流れる

山本のプロミネンスブレイドとコスモスラッシュがぶつかる

その力は拮抗して二人とも距離が離れる

コスモスラッシュのエネルギー量に耐えきれず

ムラマサブラスターが壊れた

だがもう終わりだ

「いけえーファングー！」

俺は無数のファングを発射して山本に向かわせる

「くそおーまだだ、まだ負けないんだよおー！」

そんなことを言いながらファングに突き刺されていく山本

いくつかは落としたりしいが

今は質より量だ

山本は頑張っていたがついにトランザムが終了した

その隙を逃さずファングで地面に礫にする

「なんでだ！なんで全然反応しないんだよ！」

「山本、知らないのか？トランザムを使った後は

しばらく機体性能がすげえ落ちるんだぜ？」

「な、なんだと!？」

「使い時を考えるんだったなあ!これで終わりだあ!」

俺は充電が完了したハイパーサテライトキャノンと

地面に向ける

「行くぜ、ハイパーサテライトキャノン!」

巨大なビームはアリーナを光で埋め尽くした

「ふう、終わったな」

俺は山本が死んだかキラクスに確認する

(うん、今死亡が確認されたよ、彼は僕のでで

輪廻の輪に戻しておいたから)

それはよかった、後は、

「そこにいるやつ、出てきた方が身のためだぞ」

一人いや、二人か

「チツバレたか、さすがにあんなやつじゃ無理だわな」

「まあ、仕方ないですよ、所詮は人間、

例え特典を与えても弱いのは弱いのです」

出てきたのは二人組のすんごい怪しい人たちだった

一人は筋骨隆々で、マジのブローミみたいなやつで
もう一人がひよろつとした

アンガー○ズの田中みたいなやつだった

いやいや、アンバランスすぎだろ！

「お前たちは俺を消してなにがしたいんだ？」

「ああん？たかが人間がそんな口きいてんじやねえ！」

「やっぱり、お前たちは神だな、闇墜ちした」

「わかってしまいましたか、そうですね、僕達は神です

今あなたは、あなたを消してどうしたいかと聞きましたね、それは間違いです、

僕達が消したいのはあなただけでなく

この世界そのもの、そのためにはまず

この世で最も強い危険な人間、そう、あなたを倒さなければならぬ

「何でこの世界を消すんだよ」

「それは僕達が新たな世界を作り

そこで僕達は神として再び君臨するのです」

「なんだよーただ神になりたいだけかよー

そんなの他でやれよーめんどくさい」

「うるせえ！今回は失敗したが、いつか必ずお前を

消す！いいなあ！」

「はいはい、いいからさっさと帰れ」

「わかりました、あと、僕の名前はメイズと言います

隣のやつはアランと言いますお見知りおきを」

「わかったから、さっさと帰ればーこっちは

まだやることがあるの」

「それでは、」

二人はどこかに消える

俺は山本についての最後の仕事をする

「大嘘オールフィク○ヨン○き！この世界における山本啓太の存在をなかったことに！」

これで山本に関する記憶、記録がなかったことになった

「さて、帰るか」

これから来る戦いについて考えながら帰る

今後場合によってはリミッターを外すことも考えなければいけない

今は千冬姉さんと同じくらいにリミッターをかけていて

それを含めると6つおれはリミッターを掛けている

まあ弱ければいいなあとか思いつつ俺は寮に入った

あ！俺デユノアさんと同室じゃん！

かんどうの再開

「ただいまー」

俺は部屋に帰りデュノアさんに言う

「あ、おかえりー」

デュノアさんが返してくれた

なにこれうれしい

「どこに行ってたの?」

「日課でそこら辺走ってた」

「そう、ねえ、今からご飯食べに行かない?」

「ん? いいぞ、部屋のこととかは食堂で決めようか」

「うん!」

さて、いつデュノアさんに変装がばれていることを

話そうか。

まあ適当なところで言っておけばいいよな

そんなことより飯なのサー

自室

あのあとご飯を食べ

部屋の事などを決めた

「じゃあ先風呂入ってくるね」

「うん、その間僕は課題をやってるよ」

俺は先に風呂に入ることになった

まあデュノアさん女の子だしゆっくり入りたいよね

IS学園って審査が緩いのかな？

こんな簡単にデュノアさんが入れるわけがない

この辺は難しそうだな

フランスの代表候補生らしいけど、実力はどのくらいあるんだろうな？

今のところ今度から襲いかかってくる

あのメイブとか言ってたっけ？

あいつらの襲撃に迎え撃つことが出来るのは

俺か千冬姉さん位だな

楯無さんはまだ力不足だ、みんなには力をつけてもらわないと困るからな。

いつか俺のことも話さないといけない時が来るだろう

もうすぐ行われる学年別トーナメント。

あそこで必ずあいつらは何かを仕掛けてくる

そんなときは俺が何とかしなくちゃな。

まあ、今は風呂だよー(^ o ^)

「はいいろーになったーこのーせかいにー

らしーさなんてーまるーでなくてー♪」

現在神姫、熱唱しております

いやね？風呂に入っていると無性に歌いたくならない？

あ、ないですか。すいませんでした

よし、そろそろ出るか

俺は風呂からでる

「デュノアくん、お風呂いいよ」

「あ、うん、わかった」

「それと、デュノアくんが出てきたら少しお話があるから」

俺はデュノア君に男装がもうバレていることを話そうと思う。

どうやって言おう？

そんなことを考えているうちに

デュノア君が出てきた、案外早い。

「それで、神姫君、話って何かな？」

「デュノア君、正直に答えてね、デュノア君は、

女の子だよね？」

「……………」

「沈黙は肯定ととらえてもいいかな？」

シャルルデュノア、いや、シャルロットデュノア。

「！、な、何でその名前を知っているの？」

「教えてほしい？ ついでに君のもうひとつの

名前も知っているよ、シャルロットリディアス」

「な、何でその名前まで……………」

「なんだよ、忘れちゃったのか？ シャルロット」

「君になんてあつたことないよ！」

「じゃあ俺の名前を覚えてやるよ」

「？ 君は織斑神姫でしょ？」

「今はな、昔の名前は霧雨神姫、覚えてるか？」

「え、そ、そんな、本当にあの神姫なの？」

「ああ、久しぶりだな、シャルロット、

昔の呼び方はシャルだったか？」

「う、うわあああああああん！ 神姫いいいいいい！」

「むぎやあ!？」

いきなりシャルが飛び付いてきた

てか、超力強いんですけど！

「神姫い、久しぶりい！ あいたかったよお」

さて、なぜ俺がシャルのことを知っていたかというのと、

それは少し昔、まだ一夏と会う前のことだった

過去編（笑）

シャルに出会ったのは俺がまだ一夏と会う前一年くらい前のことだった
ある晴れた春の昼頃、俺はフランスに来ていた。

理由は、まあ何となくだった。

適当に静かな場所を探していたら、少し小高い丘に
たどり着いた。

俺はその丘に登って昼寝を開始した

神姫睡眠中

「……きて、おきて、」

どこからか声がある、声からして女の子だろう

とりあえず、声に従い起きる

「んーよく寝たなあ、で、君は誰かな？」

「え？僕？僕はシャルロット リディアスって言うんだ！シャルロットでいいよ」

「よろしくシャルロット、俺は霧雨 神姫だ」

「なら神姫君だね、よろしくー」

「ああ、ところでシャルロットはこんなところにいるの？」

「天気が良かったから、少し散歩でもしようかなって思っただけだ、

そしたら神姫君がいて……」

「気になって近づいてきたって訳か」

「そうだよ」

「知らない人に近づくなってお母さんに言われなかったのか？」

「そ、それはそうだけど……なんか神姫君は大丈夫かなあーって思っただけ

この子将来大丈夫かなあ

「ま、まあ、実際なにもなかったからいいじゃん！」

「ま、そうだな」

「で、神姫君はこれからどうするの？」

「俺はまた寝る」

「え!?!寝ちやうの!?!」

「当然さあ」

「せっかく仲良くなったのにい」

「覚えておきなさい、人は眠気には勝てないのだよ」

「うう、よし！僕も寝る！」

「そっか、なら寝ていけ、俺はもう寝るからおやすみい」

「僕も寝よつと、おやすみい」

少年少女昼寝中

……トオ………ロツトオ

なにか声がして俺は目を覚ました

起き上がろうとしたら腹の上にシャルロットの

上半身が乗っかっていて起き上がれない

俺はできるだけ優しくシャルロットを起こす

「シャルロットーおきろー」

「うう、ううん」

こいつ起きねえな

少しほつぺたをつねることにした

むぎゅー

「つ、いひやいいひやい、ひんひふん、にやにしてえりゆのおー」

「いや、シャルロットが起きなかつたから」

「ほひるから、ほひるからはにやしてえー」

俺はつねっていた頬を離す

「まったく、ほつぺたが伸びちやうじやないか」

「ごめんごめん、それよりなんか聞こえるぞ」

「ほんとに?」

「ああ、少し静かにしてろ」

俺たちは耳を澄ませる

………ロットオ………シャルロットオ

「………おい、なんかシャルロットの事呼んでるぞ」

「………なんかそうみたいだね」

声が近づいてくる

「お化けかもな」

「ええ！ちよつとやめてよ神姫君！僕そいうの苦手なんだから！」

「もうすぐ、こつちに来るぞ」

「ちよ、ちよ、あばばばばば」

完全にびびってやがる

めっちゃ抱きついてくるんですけど

そして草木の中から人が出てきた

「シャルロットー！」

「きややややややあー！」

「うるせえ！」

ペシイッ

「あうっ」

デコピンで落ち着かせる

「大丈夫だ、ただの人だったから」

「え？ほんとに？嘘じゃないよね？ほんとだよね？」

「前を向いてごらん」

シャルロットは恐る恐る前を向く

その先には金色を髪をしていて

少し笑っている

「あーお母さん！」

え？あれシャルロットのお母さんなの？

金髪のロングヘアで顔は少し幼いような

身長は女性にしては高めだと思う

なにが言いたいかと言うと

スゲー美人な人だなあ

シャルロットも将来こうなるのか、少し楽しみだな

「もう、シャルロット、こんなところにいたの」

「うん、お昼寝してたんだよおー」

「お昼寝？今もう夜よ？」

「え？……ほんとだ」

空を見上げると綺麗な星空が見えた

「で、その子は？」

「あ、この子は神姫君！さっき友達になったんだよ！」

「霧雨神姫です、初めまして」

「あら、日本の方？」

「そうです、まあ、今は旅をしています」

「どうして旅をしているのかは聞かないけど、

「これからどうするの？」

「しばらくはフランスをふらふらしてますよ」

「だったら家に来ない？」

「いやいや、さすがにそれは迷惑でしょう」

「大丈夫よ、部屋は有り余ってるし、

「なによりシャルロットがそんなになついちやったしねえー」

「少しニヤついてこちらの方を見る

「俺たちの格好は俺が座り込んでいてその上にシャルロットが乗りそしてシャルロットに抱きつかれている状態だった

「あわてて俺たちは離れる

「……そ、そんなことより、本当にいいんですか？」

「ええ、大丈夫よ、シャルロットも良いわよねえ？」

「うん！神姫君なら大歓迎だよ！」

「それなら、少しの間お世話になります」

「よろしくね神姫君、あと、言い忘れてたけど、

私の名前はアリシア リディアス覚えてね」

そう言ってアリシアさんは笑った

その笑顔は、まるで太陽だった

過去編（笑） 2nd season

俺こと霧雨 神姫はアリシアさんの家の前にいる

「で、でけえ」

アリシアさんの家は簡単に言うとは、滅茶苦茶デカイ

どのくらいかというとは、ちよつとしたお城並だ

あ、わかりにくいですねごめんなさい

「こんな家を私達二人で住んでいるのよ？」

「寂しくないんですか？」

「ふふつ大丈夫よ、だってシャルロットがいるもの」

そう言つてシャルロットの頭を撫でる

「えへへーお母さん大好きー」

シャルロットは、アリシアさんに抱きついてている

なんだこのアウェイ感、帰りたいんですけど

「とにかく、中に入りましょ、あなたの話を聞かせて欲しいわ」

「まあ、話すことなんてあまりないですけどね」

「速く入ろー」

シャルロットが俺の背中を押してくる

俺とシャルロットの身長はおなじくらい

シャルロットに聞けば歳は同じだと言う

なるほど、俺の身長が小さいと

まあ、いいや。

俺は家の中に入る

「お邪魔しまーす」

「別にただいま〜でもいいのよ?」

「俺は、そんな無礼者ではありませんよ」

「子供がそんなこと気にしたらダメよ?」

「最近の子供にはいろいろあるんですよ」

「へえ〜、そうなの? シャルロット」

「んん〜? なに〜? 聞いてなかったー」

ここの子将来ほんとに大丈夫なのだろうか

「ま、まあいいわ、とにかく家を案内するわね」

そう言つてアリシアさんは俺に家の中を案内してくれた。

何故かトイレが4つあるのは驚いた

この家二人暮らしだろ？

なんで4つもいるのだろうか

そこら辺は気にしないでおう

アリシアさんにあらかた部屋を案内してもらった後

俺は、リビングに連れてかれた

「ねえ、神姫くん、君はこれからどうするの？」

「そうですねー、フランスに少し滞在して、そのあとはまたどこかに行きますよ」

「また、旅に行くの？」

「はい、世界を見てみたくて」

「そう、なら家に一週間くらいは泊まっていきなさい」

「一週間もいいんですか？」

「いいのよ、ここには私とシャルロットしか住んでないのだから」

「わかりました、ならここに一週間の間お世話になります」

「うんうん、素直でよろしい」

こうして俺のリディアス家滞在記が始まった

そんな大層なものでもないですけどね
アリシアさんはとにかく、優しかった

俺の過去を聞こうともしないし

何より不信感を何一つ持たずに俺に接してくれた。

ここ最近人と関わったのなんて本当に久しぶりだから
とても新鮮だった。

ほんと、人と喋ったのなんて

コンビニで店員さんに

「サンドイッチ温めますか？」

「いえ、大丈夫です」

くらしいの会話しかしてなかったからね

そう考えて俺には友達がいなことに気づく

シャルが友達だとしても、たった一人ですやん

神？アイツは論外だ。

とにかく、リディアス家での生活は

俺に家族といふことの楽しさを思い出させてくれた

楽しすぎて一週間だけ滞在するつもりが

いつの間にか一ヶ月になっていた

いやー、困ったもんだよおー

そろそろ作者のネタが尽きたので一ヶ月たったことにする

「本当にもう行くのね、神姫君」

「はい、もう一ヶ月も経っちゃいましたしね」

「神姫、もう行っちゃうの？」

「ああ、次は適当にアイルランドでも行くさ」

何故アイルランドかって？スマン今決めただ

「また会えるよね？」

「まあ、会えるだろ」

なんかフラグのような気もするけど

「寂しくなるわね、神姫君がいないと。ね、シャルロット恋しいもんねー神姫君いないとー」

「や、やめてよお母さん！／／／」

「やめたほうがいいですよアリシアさん、シャル怒っちゃいますよ？」

「神姫君…あなた、残念ね」

「もう…神姫のバカ！さっさと行っちゃえ！」

「えー何なんだよもう」

さて、そろそろ行きますか

「じゃあ、本当に行つてきます、最後にこれを」

「え？なにこれ？プレゼント？」

「はい、泊めてもらったお礼みたいなものです、

俺のお手製ですよ」

「開けてもいいかしら？」

「いいですよ」

アリシアさんは箱を開けた

「これって、ネックレス？」

「はい、二人の金色の髪にあわせて、色は金色にしたんですけど」

「凄く、綺麗だわ！ありがとう！」

「神姫、ありがとう！」

「どういたしまして、それじゃあ、俺はもう行きますよ、縁があつたら、また会いましよう。」

「さようならー！」

「バイバイ神姫君、また会いましょうね！」

「神姫、ありがとう！楽しかったよ、また会おうね！」

「おう！」

こうして俺はまた旅に出た

どうしてシャルたちとの生活を書かなかったのか

それは単に作者が「俺には書けない、書けないんだよお！」ってなったからだ
だったら過去編なんて作らなければ良かったのに

そこら辺は話数稼ぎらしい（生々しい）

そんな感じで現在、

「本当に、久しぶりだな、シャル」

「久しぶりだねえ、3年ぶりくらいじゃない？」

「そうだな、もうそんなに経つのか、早いよなあ時間って」

「神姫、なんかおっさんみたいなこと言うね」

「長い間一夏と暮らしているうちに、あいつのが移ったな」

「そうかもね、一夏もたまに変なこと言う時あるし」

「それって俺も変って言われてないか？」

「疑問形じゃなくて確定だよ、神姫が変なのは」

「なにー！」

こいつ、しばらく見ないうちに言うようになったじゃないか
そんな感じで俺達は、久しぶりの再開を喜んでいた。

決断

俺達は、再開を喜びあっていた。

「ところでシャル」

「何？」

俺は少し真面目な顔になる

「なんでここに来たんだ？しかも男性操縦者だなんて嘘までついて」

「ああ、うん、それは、」

「言いたくないのなら言わなくていいぞ。」

「いや、言うよ。言わないと物語が進まないからね」

「コラ、やめろ」

メタイ、メタイぞシャルロット！

シャルは何故IS学園に来たのかを話しはじめた

大まかな理由はこうだ

まず、アリシアさんは事故で亡くなってしまった

…惜しい人を亡くしてしまったな。

アリシアさんが、亡くなったあと、

シャルのお父さんと名乗る人が家に来た、

なんとシャルのお父さんはデュノア社の社長

なんだという。

だが、シャルは正妻の子ではなく

アリシアさんの娘、つまり愛人の子ということになる

当然社長の奥さんは怒るよね

それでもなんとか反対を押し切り

シャルをデュノア家で引き取ったみたいだ。

だが、シャルはデュノア家では歓迎されなかった

そんな時、デュノア社は経営危機に陥った

どうにかしようと、考えた挙句、シャルをIS学園にスパイとしてそして宣伝目的で

男性操縦者として

転入させたらしい

まあ、デュノア社としてはうまく行けば貴重な男性操縦者のデータも取れ、デュノア

家としては

邪魔なシャルを排除できると考えたのだろう。

だいたいそんな感じのことをシャルは話した

「大体話すことは話したよ」

「そっか、大変だったんだな、シャル」

「まあね、それより、神姫はなんで名字が変わってるの?」

「ああ、そういえばまだ話してなかったな。」

俺もシャルにこれまでの経緯を話した、

当然だがシャルも俺が転生者ということを知らない。

別に話してもいいんだけど、タイミングってものがあるじゃん?

とりあえず一通り話した後俺は聞きたいことがあったのでシャルに聞いてみた

「なあ、シャル、」

「ん? なにかな?」

「シャルはこれからどうしたい?」

「どうしたいって?」

「このままシャルはシャルルとしてここに居るのか、

それとも全てを話してしまうか」

「……この学園にきて、久しぶりに友達なんてできて、

みんな優しくしてくれて、神姫にも会えて、

これ以上皆に嘘なんてつけないよ」

シャルの、目から涙が零れ落ちる

そういうえばAAAの新曲の“涙のない世界” っていう歌だよね
ごめんなさい、空気読みます

「まあ。どちらにしても学園の校則があるから

学園にいる3年間は大丈夫だけだな」

「……え？」

「何条かは忘れたけど、学園に在籍する生徒は、

如何なる国家、企業の干渉を受けないって

書いてあったぞ」

「っ！それじゃあ、僕はまだ学園に居られるの？」

「ああ、だが、3年間だ、シャルに残された猶予は」

「そうだね、卒業したらまたデュノア社に縛り付けられちゃうもんね」

「……シャル、シャルはどうしたい？自由に生きたいか？」

「…、生きたいよ！僕だって皆と笑って生きていたいよ！」

「フツ、いい返事だ、もしデユノア社に何も未練がないなら俺に方法がある」
「本当に？」

「本当だ、ただし、この方法がうまく行ったら、

シヤルにデユノア社という家はなくなる、それでもいいか？」

「……うん、それでもいいよ。家なんてなんともなるよ、だからお願い、僕を……助けて」
「かしこまりました、お嬢様」

午前零時

生徒の皆が寝静まった頃、俺はとある場所に向かっていた。

「うーん、どこだったかなあー、何階だったかなあー」

右に左に上に行ったり下に行ったり来たりしているうちに

何故か屋上のドアの前まで来てしまった。

「とりあえず、屋上でも行って頭をスッキリさせよう」

そう思い、屋上の扉を開けた

ギイイ

鉄の扉が軋む音を聞きながら屋上に出る

「あ、」

「ん？」

屋上には先客がいたようだ、それも俺が今捜し求めていた人物、織斑千冬が

第21話

屋上に行くとき冬姉さんがいた

そしてその床にはお酒やおつまみなどが…

神姫「こんな時間に外でお酒飲むなんて…

感心しませんねえ織斑先生。」

千冬「ふんっ今は勤務時間外だ、見逃せ。

しかし…こんな時間に部屋を抜け出し出歩くなど感心せんなあ、神姫」

神姫「いやいや、少し千冬姉さんに話があったからね」

千冬「ほう、まあいい、こっちへ来い神姫

今日の私は気分がいいんだ」

神姫「へえ、いい男でも見つかったのか？」

見つかるうものなら一夏がぶっ飛ばしそうだな

千冬「バカを言うんじゃない馬鹿者」

バカって二回も言いやがった

神姫「はははっだろうな」

千冬「それはどういう意味だ？ 神姫」

これ詰んでね？

神姫「ベベベ別に深い意味はないよ？ それより本題に入ろうよ千冬姉さん」

千冬「どうせデュノア絡みだろう？」

あーら

神姫「やつぱりわかってたか」

俺でも気づけたんだ、当然学園側が把握していないわけがない、仮に学園側が騙されていても千冬姉さんが見逃さない。

それなのに何もしてこないということは

何か手を出さない理由があるのか

それとも今なにかするための準備中なのか

そのどちらかだろう。

俺的には前者がいいけどな

千冬「当然だ、あんな物少し調べればわかることだ」

神姫「ならなんで無視してるんだ？」

千冬「まあ、強いて言えばまだ行動を起こしていないからだな」

なるほど、ということとは少しでもシャルが動いていたら

即座に捕まっていたという訳か

ひいー怖い怖い

神姫「そうか、話がそれたね、ちよつと戻そうか。

ええつと俺、ちよつとの間学校を休ませてもらう」

千冬「……そんなことが許されるとでも思ってるいるのか？」

神姫「許されないとは思ってるけどね、許されなくても

俺は行く」

千冬「……なぜそこまでするんだ？」

神姫「シャルとは古くからの友人でさ、そいつの一大事なんだ、助けてやりたいだろ

？」

千冬「ほう、デュノアと知り合いだったのか？」

神姫「ああ、だから俺は行かなければならない

友人のために力を尽くす、素敵だとは思わないか？」

千冬姉さんは少し考えるような顔をする

千冬「2日だ、2日でケリをつけて来い、

もし遅れたら私が直々に指導してやるからな」

神姫「怖いこと言ってくれるなあまったく。

まあ、ありがとう。感謝する」

2日どころか、1日で終わらせてやるよ

早朝、まだ朝日が昇る前、

彼、神姫は動き出す……ことはなく惰眠をむさぼっていた

その横でいつもより早く起きた少女、シャルロット

は呆れた目で神姫を見ている

シャル「なんか不安になってきた」

彼女の心配を他所に神姫は未だ深い眠りについている

彼が起きるのはもう数時間先のことであつた

数時間後

神姫「ウワーツ！寝坊した！」

案の上というか、やっぱりというか、予想通りというか、彼は寝坊していた

神姫「本当は、朝の7時くらいに起きようとしたのに」

現在午前11時である

神姫「まあ、いつか。さっさと準備して行くか」

神姫はその後10分で準備をし、早速フランスへと向かう

神姫「よし、転移っ」

視界が一瞬光に包まれ、目を開けた時にはすでに違う景色が広がっていた

神姫「フランスも久々だなあ、っと感傷に浸ってる場合じゃなかったな、デュノア社にでも向かうか」

だが、神姫はあることに気づく

神姫「デュノア社って、どこだ？」

神姫はフランスに来て1分で迷子になった

神姫「むむむ、これはまずいぞお、どうやってデュノア社に行こうか」

考えられる策は

・ISで飛んでいく

・街の人に聞いてみる

・なんとなく進む

・googleマップで検索する

の4つくらいだな

この中で実用的な案は2つめか4つめだろう

その中で俺はあえて4を選ぶ！

(どこがあえてなんだよ)

googleで検索してからの彼の行動は早かった

実に早かった

目的地がわかったのは良かったが、移動手段が徒歩しかない彼にはデユノア社までの距離約20kmは長かった

軽く絶望していた

地獄の20 kmを乗り越え彼はついにデユノア社えとたどり着いた。

やあ、みなさん、どうも神姫です。

デユノア社までの道のりをすっ飛ばしてごめんね？

あの作者サボリやがったからさ

あいつこの話書き上げるのに4ヶ月くらいかかってるからね。

めんどくさいとか思ってた飛べたんだろ

そろそろ作者の批評もそこまでしておこう。

ところで今俺はデユノア社の目の前にいるんだぜ。

思ってたよりでかいな、これって普通に入り口から入っていいのかな？

とりあえず入ってみるか

俺はデユノア社の中へと入っていった。

瞬間

世界が変わった（中二感）

いや、比喩ではない

確かに彼の目の前にはごく普通の社内が広がっている。

だが人がいない、それも一人も：だ

そして何より音が無い。

完全に社内と外の世界が乖離されているということに彼は感じていた

神姫「これは：：：どういうことだ？」

発言の直後、彼は一つの気配を感じ取る

神姫「誰だ？出てこい、お前がこの世界を作ったことはわかっている」

その言葉に反応するかのように入影がゆっくりと近づいてくる

そしてその影は一瞬で神姫との距離を詰め

刀のような物で切りかかってきた

神姫「っ!!」

キインツ

神姫は間一髪隠し持っていたナイフを逆手に持って
防いだ

神姫「おいおい、いきなり攻撃とは美しくないなあ」

??「それはすまなかつたな、余りにも隙だらけだったものでな」

神姫「まあいい、ところであんた誰？目的は察したけどね」

??「我の名は雲仙。お前がこの間会ったメイズやアランの仲間と認識してもらって構
わない」

何その風紀委員みたいな名前

神姫「ならあんたも神なんだな」

雲仙「いかにも、と言っても神の役職自体は何百年も前にやめておるがな」

神姫「へえ、で、どうするよ、俺をここに誘ったんだ
殺ることは一つだろ？」

雲仙「当然。貴様の命を貰い受ける」

雲仙はそう言うときまた距離を詰めて来た

こいつ見た目ジジイのくせに早すぎるだろっ！

ちなみに見た目は白髪で長髪を後ろで縛っている齡70程のおじいちゃんである
雲仙は刀を横薙ぎに振るう

しかし神姫はナイフで太刀筋を途中で止める

お返しにと神姫は目の前の雲仙に向かって蹴りを放つ
ドガッ

雲仙「ぐうつ、な、中々やるな：っ！」

神姫は追い打ちを掛けるように
ナイフを投擲する

雲仙「こんなものっ。」

雲仙は刀を振るい軽々とナイフを弾く

神姫「流石にこれくらいじゃくたばらねえか」

雲仙「当然だ、我がこのくらいでくたばるわけがなからう」

神姫「まだ、やるの？」

雲仙「愚問だな、まだ戦いは始まったばかりだぞ？

ゆつくり楽しもうじゃないか」

神姫「生憎こっちは時間決められててな、早く帰らないと鬼軍曹からキツニー罰則が

待ってるんだよな。

だからさっさと終わらせるからな

グロス！」

雲仙「安心しろ貴様は帰ることはできない我によって消される運命なのだよ、来おお
いっ！修羅っ」

神姫と雲仙は互いにI Sを纏う

神姫はいつものグロス

対する雲仙は

全身甲冑を思わせるような赤いI Sを纏っていた

雲仙「さあ、始めようか、神と人との第一戦を！」

神姫「望むところダゼエ、雲仙ンンッ！」

今、人と神がぶつかり合う

レボリユーションッ！（意味皆無）

青と赤、2つの影がぶつかり合い火花が舞い散る。

神姫と雲仙の戦いは熾烈を極めていた：訳でもなくまだ始まってなかった

神姫「あのね作者さん、いくら冒頭の書き方がわかんないからって無理やりすぎるだろ」

雲仙「全くだ、そんなのだから感想も批評すらも来ないのだ」

そういう会話は前書きでやってほしいものだな

ふう、やれやれだぜ

神姫「まあ、文句は後においておこう。

今回はバトル回なんだから日常回みたいなグダグダギャグは無しで行こうぜ？」

雲仙「まあまあ、作者も花粉症の中頑張って書いているのだ、少しくらい大目に見てやれ」

神姫「いいやダメだ、こんなお粗末な物語でも

読者様が見ているんだぞ？

そこに妥協などない。」

雲仙「いや、妥協なんて無かったら20話と21話の間にあった謎の4ヶ月は何だったんだ」

神姫「：：いやーやっぱり妥協って大事だよねー」

妥協云々よりバトルに入りやがれ馬鹿共

神姫「だつてさ、天の声も言ってるんだし、デュエルしろよ」

雲仙「ついには天の声扱いか：：つてデュエルじゃないだろうが！」

神姫「うるせえ！やるぞコラ！」

そう言つて神姫はムラマサブラスターを構える

雲仙「そうだな、おふざけもここまでだ。」

雲仙も刀身が紅い刀を構える

そして

雲仙「はあああああつ！」

先に仕掛けたのは雲仙だった。

スラスターを吹かし勢い良く突きを放つ

神姫「そんなものっ」

神姫は少し右にズレることによって難なく躲す

雲仙「甘いわッ」

だが雲仙は飛行状態から地に足をつけ

無理やり体を回転させる

そして回転により刀は神姫に向かって行く

神姫「（・ヰ・）チッ」

神姫は、ムラマサブラスターを逆手に持ち替えて斬撃を受け止める

雲仙「オラアアッ」

神姫「ヤアアアッ」

お互い力押しの状態から切り替えて距離を取る

神姫は、ムラマサブラスターを仕舞って

ピーコックスマツシャーを2つ展開する

神姫「これでも喰らってろ！」

計18門からのエネルギー砲が雲仙へと向かっていく

雲仙は鬼の顔を模したタワーシールドでそれをすべて防いだ

防がれると理解した瞬間神姫は両手にブランドマーカ―を展開し雲仙に突っ込んだ
神姫「必殺ファンクション！」

『アタックファンクション光速拳・一閃』

白い輝きを放ち神姫は雲仙と衝突する

タワ―シールドはブランドマーカ―があたつた瞬間

まるで発泡スチロールのように砕け散り消滅する。

そして威力はそのままにブランドマーカ―は

雲仙に刺さつた

神姫は一気にブ―スターを吹かし雲仙を地面に叩きつけた

地面が崩れる音の中、一人神姫は立ち上がり距離を取る

神姫「顔面に当てられなかったのは失敗だったな」

雲仙を「ぐうう、それでも、ない、ぞ」

途切れ途切れの言葉の中雲仙は立ち上がった

雲仙「まさか開始早々こんなに重いダメージを貰うとは思わなかつたぞ。」

そう言つて雲仙はポロポロになつた胸部を見せる

神姫「けつ、そんなけよ、こつちは倒すつもりでやつたんだけどな」

雲仙「馬鹿か、儂だつて碌に神様やつとらんぜ……しかし、このダメージ量だ、回復

するのになし時間がかかるな」

神姫「言っとくけど見逃さないからな、俺はそんなに甘くないぞ」

雲仙「この雲仙、相手に背を向けたりはせん。

じゃが、少し時間稼ぎをさせてもらうぞ」

そう言つて雲仙は手を上にかざす

雲仙「来い！アークエンジェルッ」

雲仙が呼び寄せた瞬間、どこからか白い騎士風の

鎧をまとつたI Sが4機も出てきた

神姫「おいおい、なんでいきなり西洋の天使なんだよ、

ご丁寧に羽までつけやがって」

雲仙「ハハハ、我等神々が作り出した無人I Sだ

言つておろが、この前の時のゴーレムとは全くの別物だと思ふがよい」

神姫「ゴーレム？ああ、一夏と鈴との試合の時に出てきたやつか、なに、あれより強

いのか？」

雲仙「バカを言うな、次元が違うわい」

神姫「へえ」

（ぱつと見剣と盾しかないみたいだな、

それなのにゴーレムってやつより強い：か）↑神姫心の声

神姫「まあ、時間稼ぎさせるわけにもいかないし、

とつと潰しますかあ！」

神姫はアークエンジェルへと飛び出した。

アークエンジェルも神姫に狙いを定め、4機全てで襲いかかる

神姫「フアング！」

神姫の掛け声とともにフアングが10機ほど飛び出す

4機のうち、3機にフアングが襲いかかる。

所謂足止めだいわゆる

足止めだされているうちに神姫は1機のアークエンジェルに詰め寄る。

単体で戦うことを設定されていないのか、ただただ、宙に浮いているだけだ。

そこに神姫はブランドマーカで力一杯に殴った

腕部ブースターにより威力は倍増している

その結果アークエンジェルは勢い良く

吹っ飛び、壁に叩きつけられた

アークエンジェルは力尽きたのか、その場に沈黙した

神姫「ふう、残りは3機、一気にやっちゃおうか」

神姫は指をパチンツと、鳴らす

次の瞬間10機のフアングは一斉に自爆した

勿論、残り3機のアークエンジェルを道連れに

神姫「おいおい、雲仙さんよ、意外と弱かったぜ？」

雲仙「……ふっ、甘いぞ、見よ！」

神姫「ん？」

神姫は雲仙が指差した方を見る

そこには、ポロポロのアークエンジェルが4機

神姫「まだ動くつてののか？こいつは」

雲仙「そのとうり、じゃが流星にこのままでは勝てんの、

じゃから、合体せよ！アークエンジェル！」

神姫「フアツ!？」

雲仙の命令の先、アークエンジェル達は2体組になり合体した

雲仙「これが、アークエンジェル合体形態、

……プリンシパリテイだ」

外見はアークエンジェルより2周り大きくなっており

その白い装甲は健在、だが、両腕には

巨大なビーム砲のようなものが取り付けられている

神姫「こんなものつ、即殺だぜ、」

雲仙「まあ、そうあせるな、合体形態はもう一段階階あるのだそいつを特別に見せてやる、プリンシパリテイよ

合体せよ！」

そして、プリンシパリテイは合体する、

雲仙「降臨せよ、ドミニオン」

白き輝きとともに天使は降りてきた

プリンシパリテイを有に越す体格

並の白より白いまさに純白とも言える装甲

そして2枚3対の翼

そのどれもが天使を体現させるものだった

神姫「わーお、まさかアークエンジェルがこんな凄そうなものになるとは、神姫君驚きを隠せないぜ」

雲仙「どうした、臆したか？逃げるなら今の内だぞ？

儂のダメーヅもそろそろ回復するからの、」

神姫「逃げる？馬鹿馬鹿しい、こっちはシャルの期待背負ってきてるんだよ、友達と

の約束は守んなくちやな」

雲仙「そうか、美しき友情よのお、しかしこちらとて

目的があるのだそのために歯向かうものには消えてもらう必要があるからの。やれ、

ドミニオン」

ドミニオンは一瞬で消えた、

そして神姫の元に一瞬で近づき、手に持った錫杖しゃくじょうを振り回し、神姫をふっ飛ばした。

神姫「嘘だろ、ここまで強くなる

のかよ！」

いくつかの壁を突き破り神姫はスラスターを吹かして、

止まった。

だが、ドミニオンの攻撃は止まらない気がつけば

ドミニオンが迫ってきていて、殴られ、蹴られ、

叩きつけられる。

神姫は、ドミニオンの、動きに反応できず、防御に徹する他無かった。

神姫「くそつ、どうする？リミッターを外すか？

いや、まだ外さない、このくらい勝てなくてどうする

実力で勝てないなら技術で勝つだけだ！」

神姫は瞬時加速を使い今度は神姫がドミニオンの後ろに回る。

そして神姫はドミニオンにゼロ距離でピーコックスマツシャーを撃った
ゼロ距離で撃つたため、ピーコックスマツシャーは

壊れてしまい、神姫自身にも、ダメージはあつたが、

確かな手応えを感じた。

……だが

煙が晴れるより早く、飛び出してきたのは

ドミニオンの白き腕だった。

ドミニオンの神姫は顔を捕まれ

後ろに飛ばされていく、

神姫は壁に打ち付けるように埋められた

ドミニオンは錫杖を前に掲げ、光の輪っかを3つ神姫に飛ばした

輪っかは神姫に触れた瞬間

神姫を固定した。

その向こうには魔法陣を展開する

ドミニオンが。

神姫「おいおい、オーバーキル過ぎるだろ

ちよつとは手加減しろよな」

手加減？そんなもの知らんと言わんばかりに

ドミニオンは魔法陣から特大のレーザーが

発射され、神姫を呑み込んだ。

雲仙「むむ、ドミニオンをヘヴンリーバーストを使わせるまで追い込んだか、人の身としては良くやったほうだろう」

雲仙は勝利を確信していた、それ故に雲仙は知らなかった。

倒したと思っていた、

そんなわけないだろうそんな声が聞こえた気がした

刹那

巨大なエネルギー砲がドミニオンに直撃した

雲仙「!?なにいつ！」

エネルギー砲はドミニオンを貫通、消滅させ

その延長線上にいた雲仙にも直撃した。

そのダメージ量は決して看過できるものではなかった

雲仙「ぐうう、ドミニオンが：っ！」

どこだ！神姫！生きているのだろうか！」

神姫「ここだよおー」

声が出したのはエネルギー砲が飛んできた

方向だった、まあ、当然といえばそうだが

そこにはハイパーサテライトキャノンを展開していた

神姫がいた。

神姫「ふいー危なかつたあー、さあさあ、

雲仙さんよ、最終決戦を始めようぜ？」

雲仙「ああ、そうだな最後は儂自ら消してくれよう！」

決着の時は近い

トランザムライザアアアツ（出てきません）

さて、どうするか、俺はブランドマーカを展開しながら作戦を考える。

雲仙は手に赤いガントレットを装着したまま

こちらの出方を伺っている。

使える武装は残り少ない、エネルギーも心許ない、

よって考えだされるは一撃必殺、一発で勝負を決めるしかない。

神姫「これで、終わらせる。」

雲仙「さて、最後に立つのはどちらかの？」

神姫「当然、俺だ！必殺ファンクション！」

『アタックファンクション、雷神拳』

雲仙「いいや、勝つのは神々じゃ！煉獄魔法！」

『魔法陣展開、煉獄ノ拳』

両者は同時に飛び立ち、ぶつかり合う

白い稲妻と、黒い炎、その2つは激しく弾け、

消し飛んだ。

爆風の後に現れた光景は、

俺の、神姫の拳が雲仙を貫通している光景であった。

雲仙「ゴフツ、み、見事、あつぱれで、あつた」

その言葉を最後に、雲仙は動かなくなった

神姫「なんか、呆気無かったな、でも、

久々に楽しかったぜ雲仙。」

その言葉と同時に、パリインと何かが割れたような音が響く。

神姫「ちつ、グロスももう限界か、まあ仕方ねえよな、ドミニオンにあそこまでやられちまったもんな、

無理矢理サテライトのエネルギー貯めてたし、

今まででありがとな、グロス」

その言葉に反応するかのよう、俺がグロスから取り出したコアが砕け散る、その瞬間グロスという機体ごと全て粒子となって霧散した。

ここで、メイドイン俺のIS全てに共通する弱点を説明しよう、普通のISは、機体とコア、それぞれ別になって存在する、なぜなら、機体数に対し、コアのほうが圧倒的に少ないからだ、それに対し俺のISは、

コアと機体、その2つがあつて一つとして機能している。

まあ、作者の説明力不足でわからなかったと思うが、

要するに、コアが破壊されたら機体ごと消えてしまうと思つてくれればいい、

雲仙の最後の一撃は、運悪くコアのある胸の中央に炸裂した、ドミニオンとの対戦で負荷をかけ過ぎてしまったためか、いとも簡単にこわれてしまった。

まあ、敵の一人を倒すことが出来たのでよしとしよう

そう心の中で結論付けると急に引つ張られるような

感覚に襲われた、恐らくこの仮想世界を作っていた

雲仙が消えてしまったので、この仮想世界自体が崩壊しているのだろう、

俺の意識は徐々に薄くなつていった

気がつけば俺はデュノア社のビルの前に立っていた、

どうやら元の世界に戻ってきたみたいだ。

（やあ、神姫くん、久しぶりー）

神姫（何だよ、急に念話してきてどうしたんだキラクス）

キラクス（ははは、伝えたいことがあつてね、

まずは、一柱目の神の撃破、おめでどう）

神姫（ああ、サンキュ、）

キラクス（早速だけど、君に伝えたいことがある）

神姫（もつたいぶってないでいってくれよな）

キラクス（そうだね、まずはシャルロットちゃんのこととはもう解決したよ、安心してくれ、君はもう日本に帰れる）

は？一瞬何言つてんだこのゴミとか思ってたけど

静かに話を聞く

キラクス（ええつと神姫くんが雲仙を倒してくれたおかげで、世界が改ざんされたんだ）

神姫（つまり、どういことだつてばよ）

キラクス（もともと、シャルロットちゃんは

女の子としてIS学園に転入するはずだったんだ、

デュノア夫妻が、シャルロットちゃんへの償いを込めてね、

彼女にはなんのしがらみもなく生きて欲しいって）

神姫（ほうほう、そこで雲仙が絡んでくるのか？）

キラクス（うん、彼はシャルロットちゃんを転入させる少し前に現れて、デュノア社をまるごと洗脳してしまったんだ、そして、デュノア社をうまく操り、

シャルロットちゃんを男として入学させ、君をここに呼び出そうとしていた）

神姫（ならシャルも洗脳を受けていたことになるのか？シャルにそんな気配は感じなかったぞ？）

キラクス（うん、彼女はただ巻き込まれてしまっただけの不運な少女さ）

神姫（で、それと俺が雲仙を倒したことにどう繋がるんだ？）

キラクス（雲仙は洗脳をつかって、世界線を無理やりねじ曲げたんだ、だけど、神姫くんが雲仙を倒してくれたおかげで世界線は元通りになって、

シャルロットちゃんが無事女の子として転入してくる

世界線に戻った、つまり、全部丸く収まったというわけさ）

神姫（じゃあ、俺はなんでここに来たことになってるんだ？）

キラクス（ああ、それはシャルロットちゃんに頼まれて、デュノア社の第三世代ISの制作に協力をするという目的で君はいまフランスにきています、あ、

神姫くんのお姉さんからの許可は貰ってるよ。

2日で帰ってくるっていう条件付きでね）

神姫（要するにそんなに変わらないってことか、
ならば、これからも神を倒したら神によってねじ曲げられた世界線は戻るのか？）

キラクス（確かに世界線は、元にもどるけど、

恐らくこんなことはもう怒らないと思うよ？

世界線に干渉するなんて僕だってかなり力を使うからね、メリットがなさすぎる。）

神姫（じゃあ、なんで今回はこんなことしたんだろうな）

キラクス（多分、力を使っても勝てるって思ったんだろうね、）

神姫（そうか。で、何か他に伝いたいことでもあるか？）

キラクス（いいや、特にないよ？）

神姫（なんだよ、敵の人数がわかったとか、

どんな奴がいるのかとかわかってないの?)

キラクス(あははーなかなか、敵の足取りがつかめなくてね、こっちも苦戦してるんだよね)

神姫(そうですか、じゃあ、頑張って捜索して下さい)

俺はそう言って念話を切る

突然の急展開で俺も読者の皆様もついていけないと思うが、どうやらみんな幸せのハッピーエンドみたいだね。

よかったよかった

さて、確かここでの目的はデュノア社のIS造りの協力だったね、

恐らく読者の皆様はIS造りなんて別に見たくないよね、

なので次のお話あたりに

ダイジエスト風でお送りします

なにやら変な電波を受信しながら

俺はゆつくりとデュノア社に入っていった

おまけかな。（読まなくていいよ）

今回のお話では圧倒的にギャグが足りてない！

なので最近出番のない一夏君をお呼びしました

一夏「え？なんで俺なんだよ！」

だって、出番ほしいでしょ？

一夏「確かに出番はほしい、だけど！

あんな話の後になんで俺なんだよ！」

はて？あんな話とは？

一夏「いきなり世界線がどうかわけわかんねえよ、

読者の皆様も置いてけぼりだよ！」

それに関してはまあ、触れないでいただきたい

で、どう、久々の投稿だよ、

いつもいつも早く投稿しますとか言ってるくせに

大体一ヶ月後とかに投稿することに対する意見とか

今回なんて途中で間違えて投稿するという愚行を犯したわけだからね

一夏「ああーやつぱりそれはダメでしょ、

読者様に対してね、投稿しますよ詐欺をしたらいけないよ、たまに活動報告で生きてますよアピールなんかしちやつてさ、その割に作者全く書いてないからね」

おおう、一夏君なかなか、痛烈な意見だね

一夏「そりやそうでしょ、一ヶ月もおまたせして

こんな稚拙な文章読まされて、読者の気持ちも考えろってんだ」

作者（?・ω?・）」

ほら、作者だつて泣いてるぞ

一夏「てかお前誰だよ！」

おわり